

2017 年度
調査報告書

小学生のスポーツ活動における
保護者の関与・負担感に関する調査研究

目次

研究概要	1
調査報告	
1章 インターネット調査	3
1. 調査概要.....	5
2. 調査結果.....	8
3. 結果のまとめ.....	33
2章 母親に対するグループインタビュー	35
1. 調査概要.....	37
2. 調査結果.....	39
3. 結果のまとめ.....	47
3章 地域クラブ事例調査	49
1. 調査概要.....	51
2. 調査結果.....	52
3. 結果のまとめ.....	60
まとめと考察	61
参考資料	65

研究概要

1 研究目的

「親の都合で子供がやりたいスポーツができないなんて、バカらしいよ」

これは研究の過程でお会いした方が、悩む母親にかけられた言葉だが、そもそも本研究の契機となった思いもここにある。小学校期のスポーツは、多くの家庭においては「習い事」の1つとして捉えられ、保護者の意向が大きく関わってくる。子供本人が希望する「習い事」を、親の都合で諦めさせるというのは、決して珍しくない光景ではないだろうか。

特にスポーツ活動の場合、保護者にはさまざまな関与・支援が求められる(藤田 1995、永井 2010 など)。そのような状況を反映してか、母親に対する調査では、子供の音楽や芸術に関わる活動よりも、スポーツに関わる活動のほうが、「応援・手伝いの負担が大きい」という結果が出ている(ベネッセ教育総合研究所 2013)。また、渋谷(2016)は、「保護者の負担感やそれに伴うトラブルは現場での問題意識は高い」と指摘し、「保護者の支援体制を効果的にするための条件整備」の必要性を説いている。

このように、一方で保護者の関与・支援があつてこそ、子供のスポーツ環境が支えられてきた実態がある。他方で、そうした支援活動に対する母親自身の負担感が、子供のスポーツ活動参加を阻む要因になる可能性もある。

母親たちは、子供のスポーツ活動を支えることをどのように捉えているのだろうか。どのような点に負担、あるいはやりがいを感じているのだろうか。また、負担感の強い親のもとでも小学生が希望するスポーツができるためには、どのような環境が必要なのだろうか。本研究では、母親に対する調査を通してこのような問いを明らかにしていきたい。

※本研究では、「子供が団体(クラブ・教室等)に所属して定期的に行っているスポーツ活動」を「スポーツ活動」と略している。

2 調査設計

本研究では、以下の3調査を実施している。

- ① インターネット調査
- ② 母親に対するグループインタビュー
- ③ 地域クラブ事例調査

各調査の概要は後述する。

3 体制

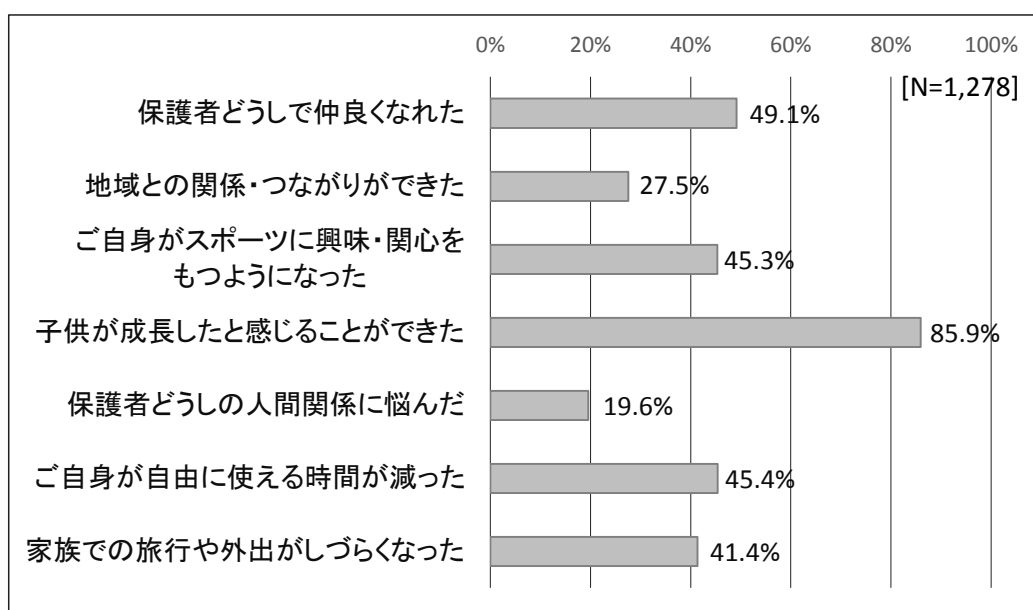
本研究の企画・実査・分析は、以下の笹川スポーツ財団の研究員が担当した。

- ・宮本 幸子(公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 研究員)
- ・山田 大輔(公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 研究員)
- ・澁谷 茂樹(公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 主席研究員)

(5) 母親自身の変化

子供のスポーツ活動を通じた、母親自身の変化について尋ねた(図表 1-19)。最も多かったのは、「子供が成長したと感ずることができた」(85.9%)であった。また、「ご自身がスポーツに興味・関心をもつようになった」(45.3%)も半数近くに達した。人間関係については、「保護者どうしで仲良くなれた」(49.1%)、「地域との関係・つながりができた」(27.5%)という変化もある一方で、「保護者どうしの人間関係に悩んだ」は19.6%であった。また、「ご自身が自由に使える時間が減った」「家族での旅行や外出がしづらくなった」は約4割であった。地域クラブの所属有無別、保護者の期待別にみると、地域クラブに所属している場合や、保護者の期待が大きい場合ほど、さまざまな変化をより多く感じていることがわかった(図表 1-20)。

図表 1-19 母親自身の変化(スポーツ活動をしている子)



図表 1-20 母親自身の変化(スポーツ活動をしている子・地域クラブ所属別、保護者の期待別)

	地域クラブ所属		保護者の期待			
	所属 (391)	無所属 (887)	トップレベルの選手をめざす(68)	校内で活躍できる(421)	人並みにできる(580)	生活に困らなければ下手でもよい(205)
保護者どうしで仲良くなれた	67.8%	40.9%	76.5%	57.7%	43.6%	38.0%
地域との関係・つながりができた	47.3%	18.8%	54.4%	33.0%	22.1%	22.4%
ご自身がスポーツに興味・関心をもつようになった	57.0%	40.1%	75.0%	56.3%	38.1%	33.2%
子供が成長したと感ずることができた	88.7%	84.7%	89.7%	91.0%	85.2%	76.1%
保護者どうしの人間関係に悩んだ	33.0%	13.6%	41.2%	25.4%	15.7%	11.7%
ご自身が自由に使える時間が減った	59.6%	39.1%	67.6%	54.2%	39.0%	38.5%
家族での旅行や外出がしづらくなった	61.6%	32.5%	72.1%	53.0%	34.3%	27.8%

注) 図表 1-19、1-20 ともに「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

以上、スポーツ活動をしている子供の家庭の様子を確認した。子供のスポーツ活動には主に母親が関与し、多くの支援にやりがいを感じる一方で、送迎や費用の支払いなどに負担を感じている。特に地域クラブに所属する場合や、子供への期待が高い母親は、スポーツを通じたよい変化をたくさん感じる一方で、悩みも多く抱えている。

1章 インターネット調査

1. 調査概要

1. 1 調査目的

保護者による子供のスポーツ活動に対する関与の実態や意識、また子供のスポーツ活動に対する考え方や意見などを明らかにする。

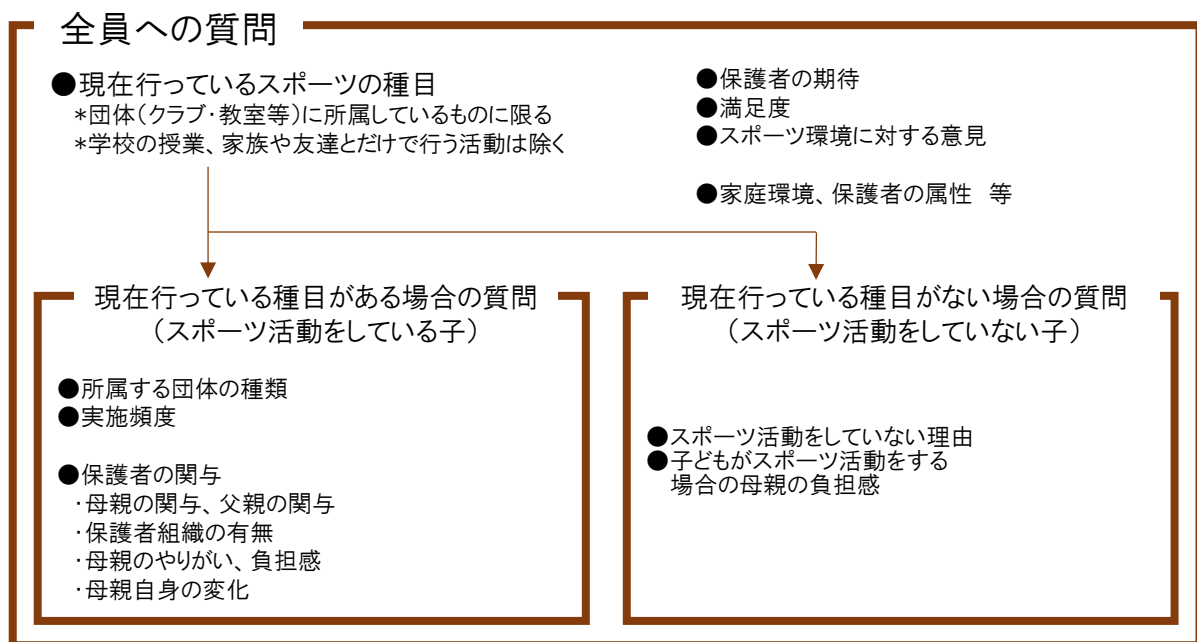
1. 2 調査方法・調査対象

調査会社の登録モニターを用いたインターネット調査。小学校1年生～6年生の第1子をもつ母親を対象とし、複数の子供がいる場合は第1子について回答してもらった。回収にあたっては、対象となる子供の学年・性別が均等になるよう割付をしている。有効回答数 2,368 人。

1. 3 調査時期

2017 年 2 月

1. 4 主な調査項目



※具体的な調査項目は、笹川スポーツ財団のウェブサイト上に掲載している基礎集計表で確認することができる。

1. 5 調査結果を読む上での注意点

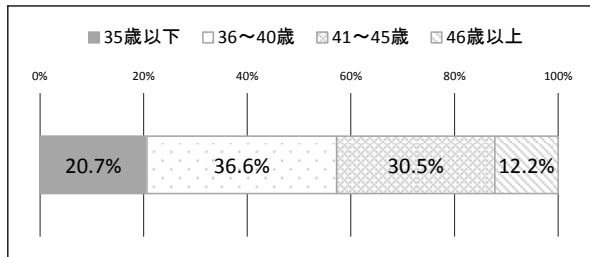
- ・図表中の「人口規模別」の人口は、居住地(市区町村)の回答をもとにして特定・算出している(総務省「平成 28 年 1 月 1 日住民基本台帳人口・世帯数、平成 27 年(1 月 1 日から同年 12 月 31 日まで)人口動態(市区町村別)(総計)」を使用)。
- ・図表中の「保護者の期待別」「地域クラブ所属別」については、それぞれ「保護者の期待(図表 1-6 参照)」「所属する団体の種類(図表 1-8 参照、「地域のスポーツクラブ」所属の有無でわけている)」の回答結果をもとに分析している。
- ・表中の数値で 5 ポイント以上の差がある場合には<>、10 ポイント以上の差がある場合には<< >>の記号をつけている。
- ・本調査は登録モニターを用いたインターネット調査であるため、回答者に偏りがある点には留意が必要である。当財団が実施する別調査(訪問留置法)と比較すると、人口規模の大きい地域の居住者が多く含まれているが、ウェイト等を用いた補正は行っていない。

1.6 基本属性

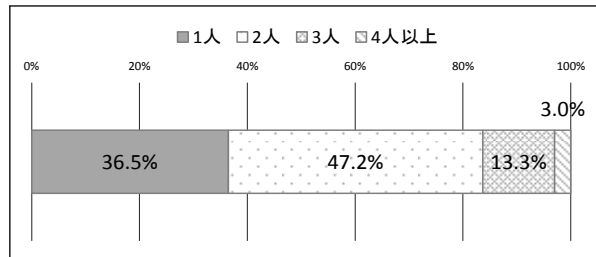
子供の性別・学年

男子						女子						合計
1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	
199	198	199	198	195	197	196	196	198	198	197	197	2,368

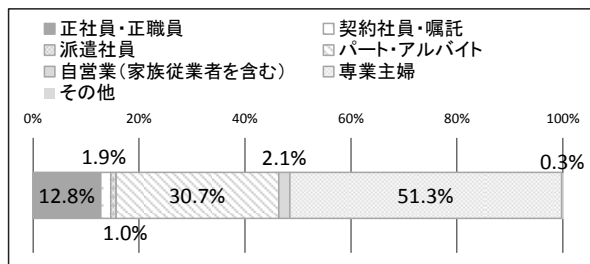
母親の年齢



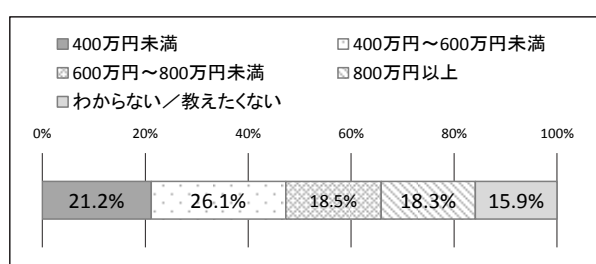
子供の人数



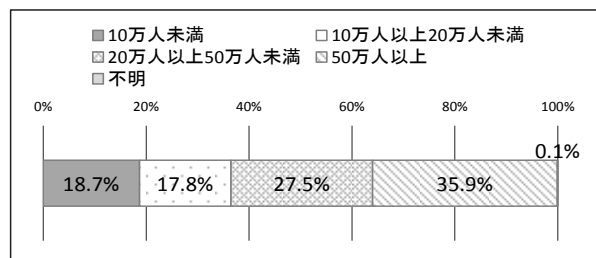
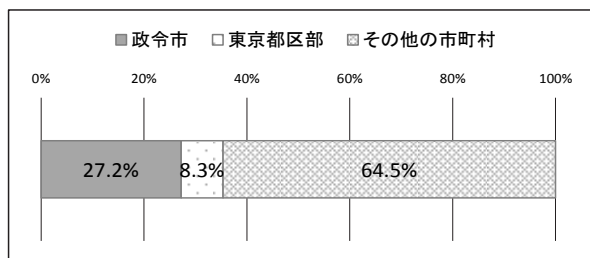
母親の就業形態



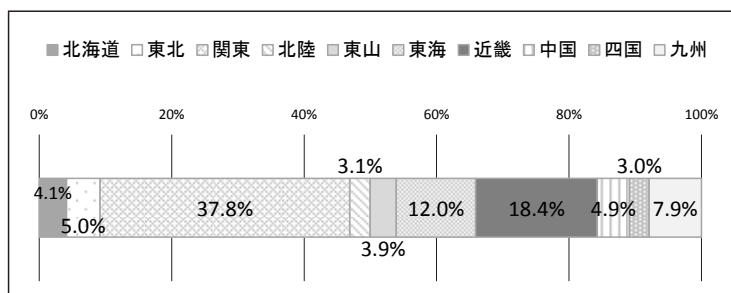
世帯年収



居住地(市区町村)の人口規模



居住地区



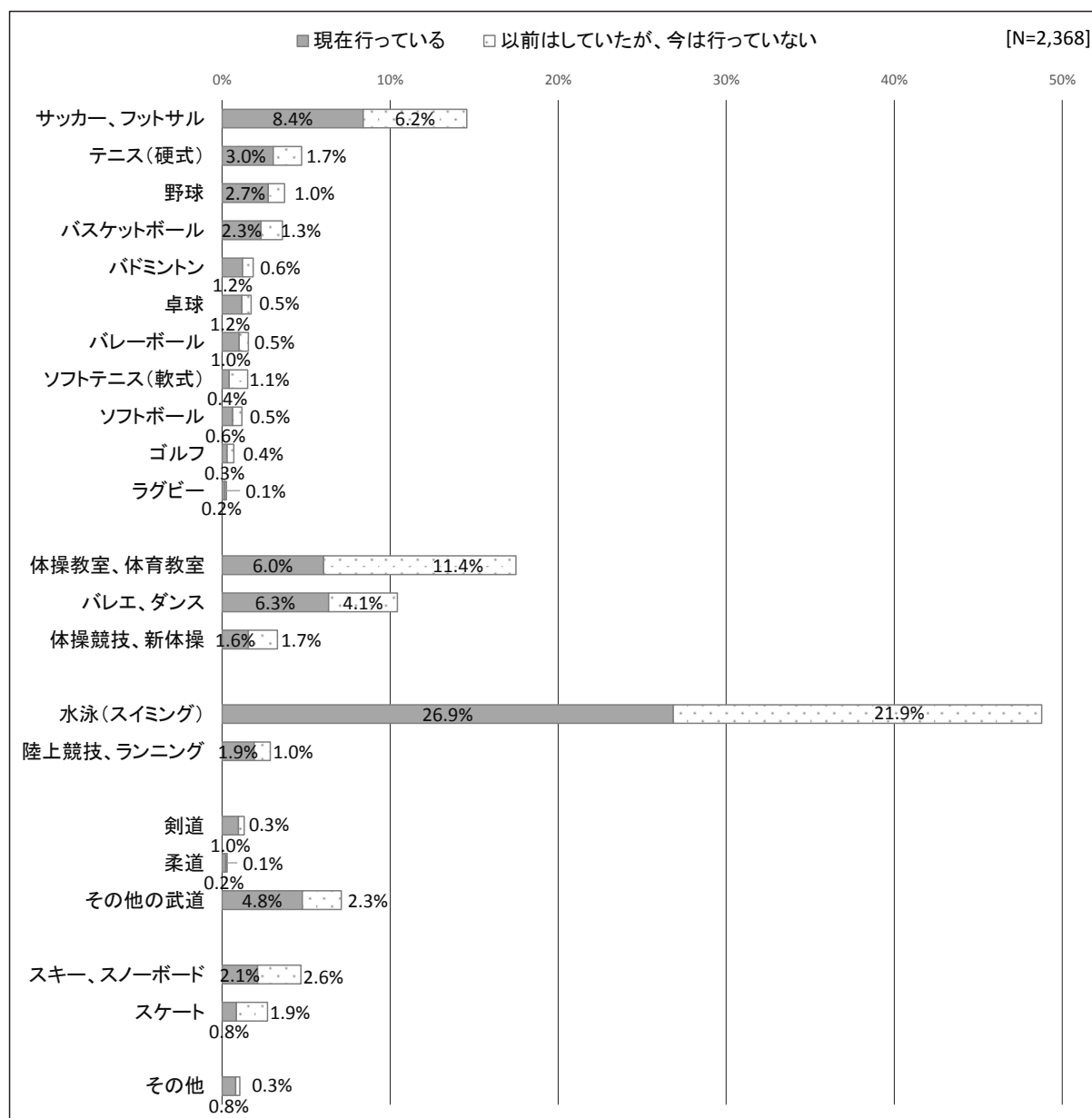
2. 調査結果

2. 1 子供のスポーツ活動

(1) 子供が行っている種目

「お子様は小学生になってから、団体(クラブ・教室等)に所属して、以下のようなスポーツ活動を定期的に行ったことがありますか」と尋ねたところ、「水泳(スイミング)」が最も多く、「現在行っている」(26.9%)と「以前はしていたが、今は行っていない」(21.9%)を合わせると、5割近くが経験していた。他の種目では、「サッカー、フットサル」「体操教室、体育教室」「バレエ、ダンス」が多かった。

図表 1-1 子供が行っている種目

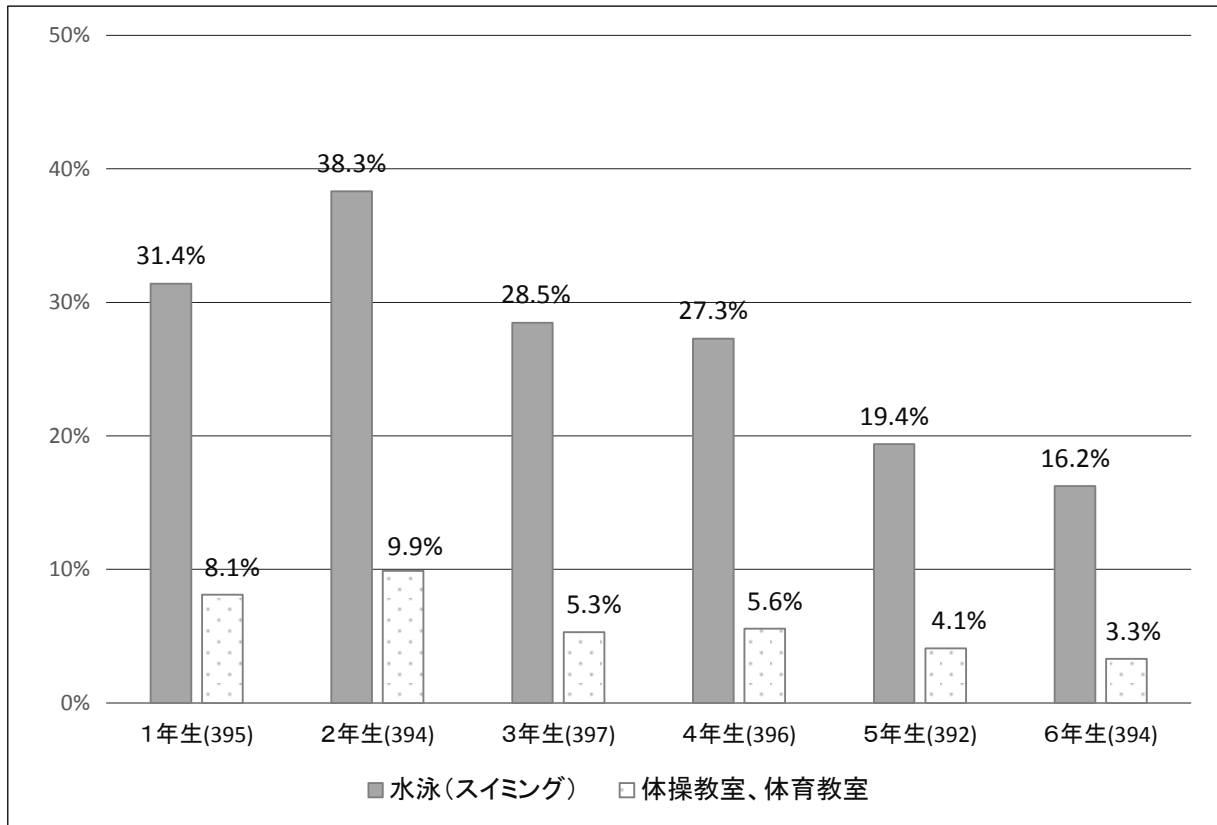


注 1) 質問紙上では、「体操教室、体育教室」には「跳び箱、マット、鉄棒、走り方などを指導する教室」という注釈をつけている。

注 2) 質問紙上では、「その他の武道」には、「空手、相撲、少林寺拳法、合気道など」という注釈をつけている。

このうち、「現在行っている」種目に関して学年別に分析すると、「水泳（スイミング）」「体操教室、体育教室」で学年による差が大きく、いずれも低学年で「現在行っている」比率が高い（図表 1-2）。特に「水泳（スイミング）」は、1・2年生では3割以上が「現在行っている」のに対して、5・6年生では2割以下である。

図表 1-2 子供が行っている種目(学年別)

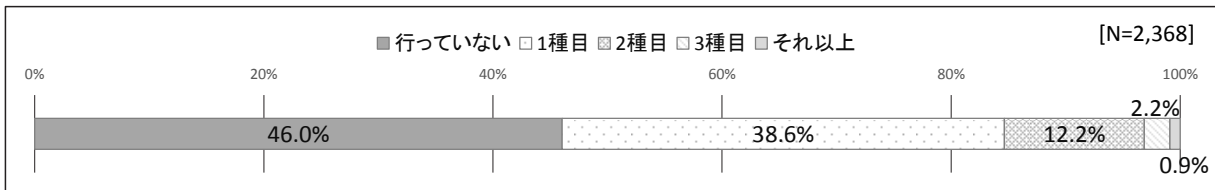


注 1)「現在行っている」の%。

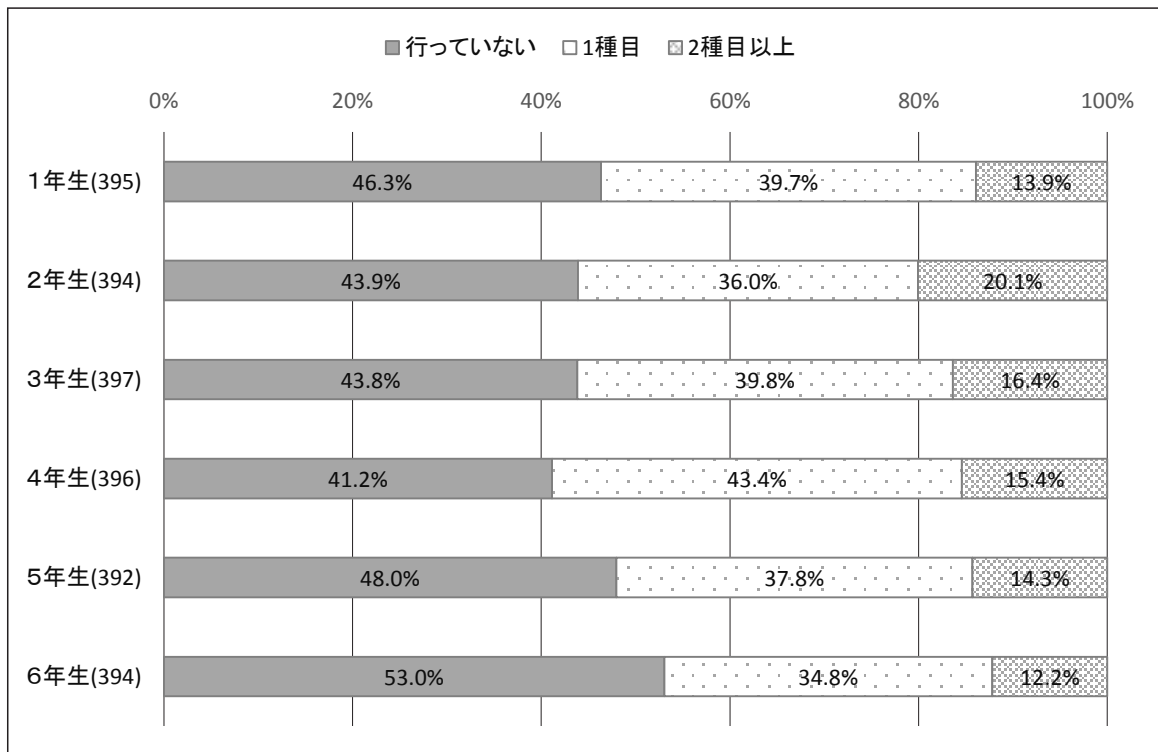
(2) 現在行っている種目数

図表 1-1 の「子供が行っている種目」の回答をもとに、現在行っている種目が1つでもあるか否か、また、ある場合はその種目数を算出した(図表 1-3)。結果をみると、現在スポーツ活動を何も「行っていない」が46.0%、「1種目」が38.6%、「2種目」が12.2%であった。学年別にみると(図表 1-4)、「1種目」「2種目以上」は2~4年生で多く、「行っていない」は5・6年生で多い。性別では女子で「行っていない」(53.5%)が過半数を占めた(図表 1-5)。また、世帯年収別にみると、世帯年収が低いほど「行っていない」の比率が高くなり、「400万円未満」では58.7%であった。

図表 1-3 現在行っている種目数



図表 1-4 現在行っている種目数(学年別)



図表 1-5 現在行っている種目数(第1子性別、世帯年収別)

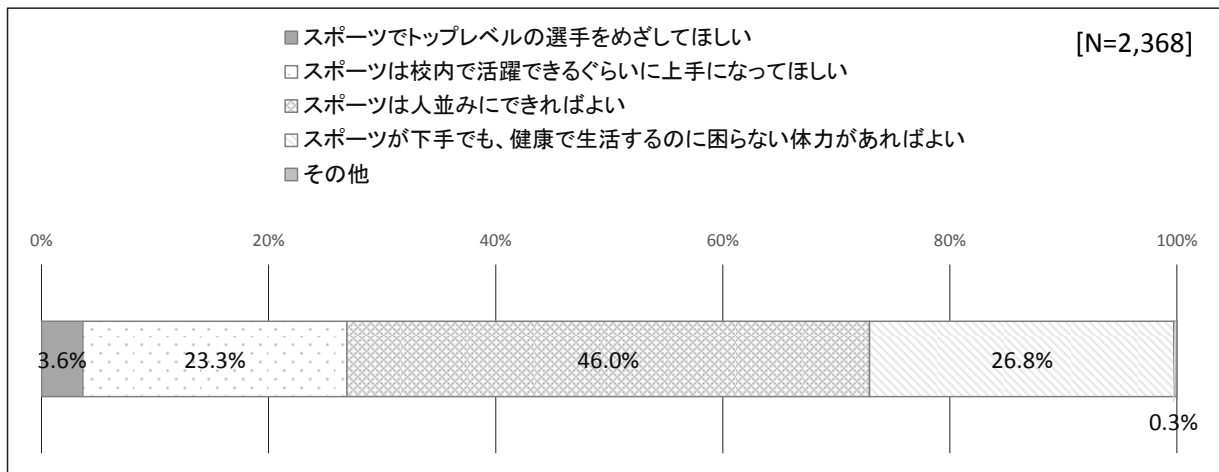
	性別		世帯年収			
	男子 (1,186)	女子 (1,182)	400万円未満 (501)	400万円～ 600万円未満 (619)	600万円～ 800万円未満 (439)	800万円以上 (433)
行っていない	38.6%	<< 53.5%	58.7%	>> 46.5%	42.1%	> 32.8%
1種目	42.6%	> 34.6%	30.7%	< 39.3%	41.9%	43.6%
2種目以上	18.8%	> 11.9%	10.6%	14.2%	15.9%	< 23.6%

(3) 保護者の期待

「お子様にはどれくらいスポーツができてほしいと思いますか」と4択で尋ねたところ、「スポーツは人並みにできればよい」が最も多く、46.0%であった。続いて「スポーツが下手でも、健康で生活するのに困らない体力があればよい」(26.8%)、「スポーツは校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい」(23.3%)の順に多く、「スポーツでトップレベルの選手をめざしてほしい」は3.6%であった。

性別では女子よりも男子が、また世帯年収の高い家庭のほうが、期待の度合いが高くなる傾向がみられた(図表 1-7)。

図表 1-6 保護者の期待



図表 1-7 保護者の期待(第1子性別、世帯年収別)

	性別		世帯年収			
	男子 (1,186)	女子 (1,182)	400万円未満 (501)	400万円～ 600万円未満 (619)	600万円～ 800万円未満 (439)	800万円以上 (433)
スポーツでトップレベルの選手をめざしてほしい	3.7%	3.6%	4.2%	3.1%	3.9%	4.4%
スポーツは校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい	25.7%	20.8%	17.8%	23.4%	23.9%	28.4%
スポーツは人並みにできればよい	46.1%	45.9%	44.9%	47.5%	47.4%	46.0%
スポーツが下手でも、健康で生活するのに困らない体力があればよい	24.1%	29.5%	32.7%	25.7%	24.4%	21.2%
その他	0.3%	0.2%	0.4%	0.3%	0.5%	0.0%

(4) 所属する団体の種類

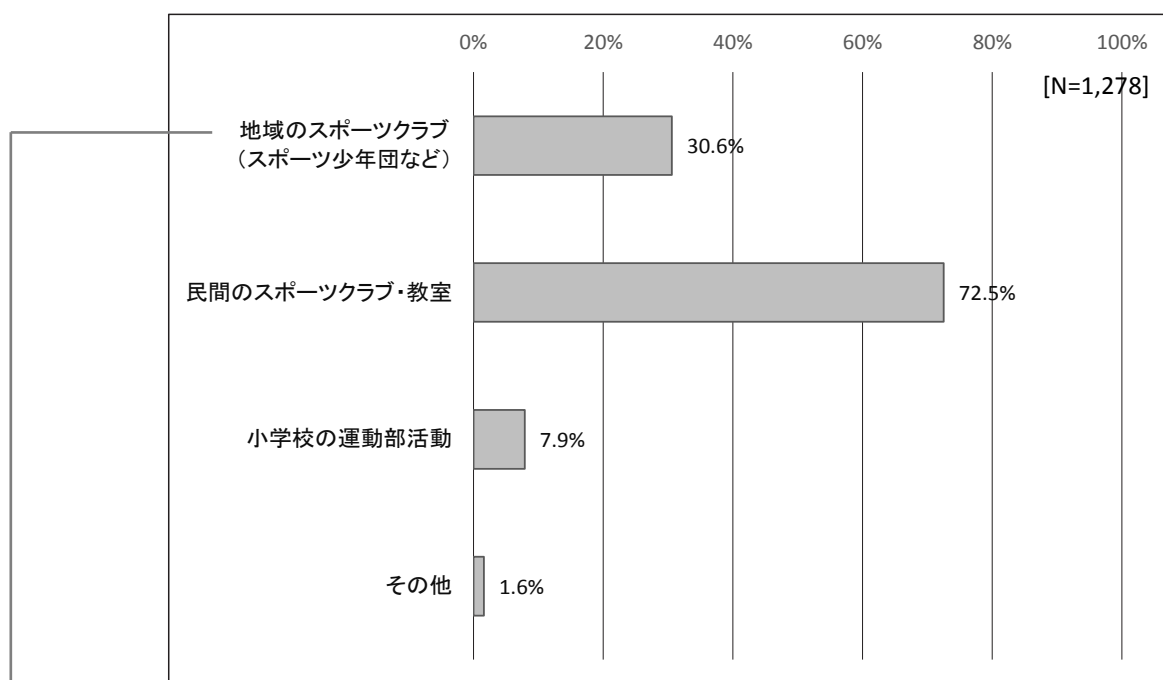
子供がスポーツ活動を行っている場合のみ、「お子様は、どのような団体(クラブ・教室等)に所属してスポーツ活動を行っていますか」と尋ねた(図表 1-8)。1人で複数の種目を実施している場合には各種目に対して主な所属団体を尋ねているため、数値の合計が100%をこえている。

結果をみると、「民間のスポーツクラブ・教室」が最も多く72.5%、続いて「地域のスポーツクラブ(スポーツ少年団など)」(30.6%)、「小学校の運動部活動」(7.9%)の順であった。

さらに、「地域のスポーツクラブ」の所属率を、第1子性別、学年別、居住地の人口規模別、保護者の期待別に分析した(図表 1-9)。性別では女子よりも男子のほうが高い。これは地域クラブで活動する種目に、野球やサッカーといった男子の実施率が高い種目が多い点が影響しているだろう。また、学年別では、高学年で地域クラブの所属率が高かった。居住地の人口規模別では、「10万人未満」で特に地域クラブ所属率が高く、39.7%であった。都市部のほうが民間のスポーツクラブ・教室の数が多く、小学生の家庭にとって選択肢が多い環境であると考えられる。保護者の期待別では、「トップレベルの選手をめざす」で地域クラブの所属率が47.1%と高かった。地域クラブのなかには、大きな大会での勝利やトップレベルの競技力をめざして熱心に活動する親子も、一定程度いることが推察される。

以上、子供のスポーツ活動に関する調査結果を確認した。保護者の関与・負担感を検討する前提として、子供のスポーツ活動には、子の属性、家庭環境、地域環境、保護者の期待などが影響している。特に地域クラブでは男子・高学年が多く、また保護者の子供に対する期待も高いことがわかる。

図表 1-8 所属する団体の種類(スポーツ活動をしている子)



注)同一人物が異なる種目で同じ団体の種類を選択していた場合、団体の種類は1として計上。たとえば2種目を「地域のスポーツクラブ」で実施している場合は「地域のスポーツクラブ」1、1種目を地域クラブ・1種目を民間クラブで実施している場合は、「地域のスポーツクラブ」1・「民間のスポーツクラブ・教室」1として計上している。そのため合計が100%をこえている。

図表 1-9 地域クラブの所属率(スポーツ活動をしている子・第1子性別、学年別、人口規模別、保護者の期待別)

性別		学年					
男子 (728)	女子 (550)	1年生 (212)	2年生 (221)	3年生 (223)	4年生 (233)	5年生 (204)	6年生 (185)
35.6%	24.0%	20.3%	28.5%	32.3%	31.8%	35.3%	36.2%

居住地の人口規模				保護者の期待			
10万人未満 (224)	10万人以上 20万人未満 (224)	20万人以上 50万人未満 (368)	50万人以上 (460)	トップレベルの選手をめざす(68)	校内で活躍できる(421)	人並みにできる(580)	生活に困らなければ下手でもよい(205)
39.7%	29.5%	32.3%	25.2%	47.1%	37.8%	24.8%	26.3%

地域クラブが多い種目の例	民間クラブが多い種目の例
野球(81.5%)	水泳(90.7%) 硬式テニス(83.3%)
バスケットボール(56.4%)	体操教室・体育教室(81.1%)
サッカー(47.2%)	バレエ・ダンス(78.7%)
	スキー・スノーボード(52.0%)

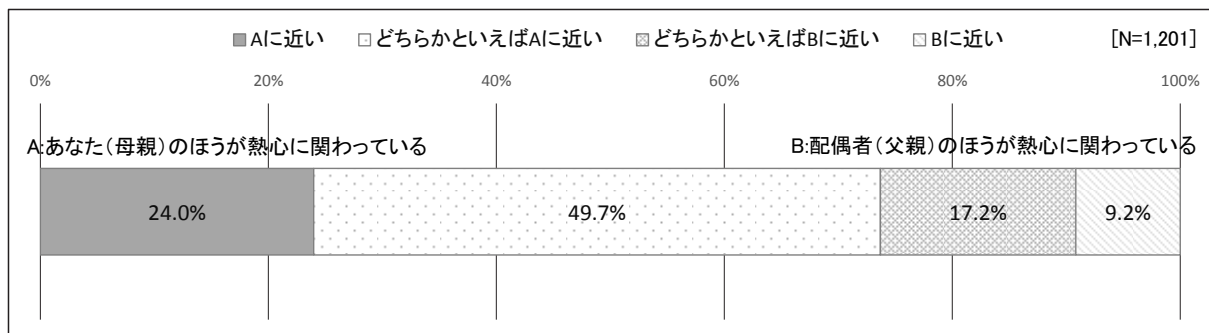
注)()内の数値は、各種目の実施者が、図1-8の4つの選択肢のなかから「地域のスポーツクラブ」/「民間のスポーツクラブ」を選択した割合を示す。

2. 2 スポーツ活動をしている子供の家庭

(1) 家庭内の様子

「お子様のスポーツ活動における、ご家庭での様子についてあてはまるものを1つ選んでください」という質問をしたところ、家庭内では「母親のほうが熱心に関わっている(Aに近い、どちらかといえばAに近い)」が合わせて 73.7%、「父親のほうが熱心に関わっている(Bに近い、どちらかといえばBに近い)」が 26.4%であった。子供のスポーツ活動に対しては、母親が中心に関与している家庭が多いことがわかる。

図表 1-10 家庭内の様子(スポーツ活動をしている子)



注1) 配偶者がいる人のみ回答。

注2) 実際の設問では行っている種目ごとに尋ねている。複数の種目を行っている場合は、1つめに選んだ種目について集計をしている(2種目以降で集計しても傾向が変わらないことを確認している)。

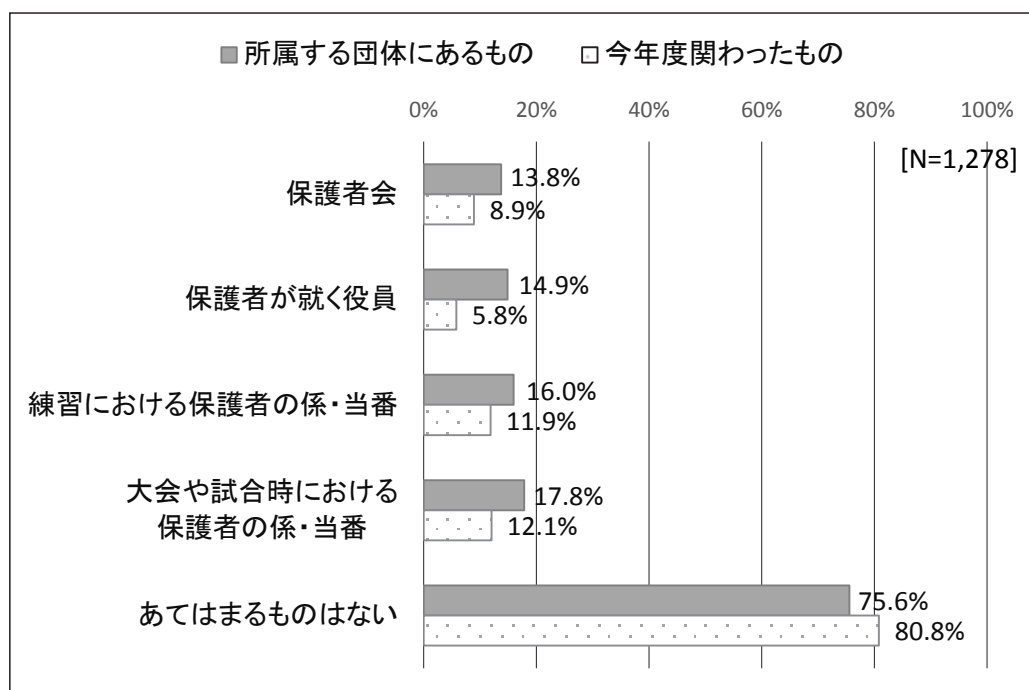
(2) 所属する団体の保護者組織

子供が所属する団体(クラブ・教室等)にある保護者組織と、そのうち2016年度(調査の回答年度)に母親自身が関わったものを、それぞれ複数回答で選んでもらった。回答者自身が関わったもので多いのは「練習における保護者の係・当番」「大会や試合時における保護者の係・当番」で、約1割の保護者が実際に係や当番を務めていたことがわかる。「保護者が就く役員」は14.9%が「所属する団体にある」としているが、実際に自身が関わったのは5.8%であった。自身が関わったもので「あてはまるものはない」とした人は80.8%であり、逆に考えると約2割の母親は、なんらかの形で保護者会や役員、当番に関わっていたことになる。

同じデータを、地域のスポーツクラブで活動する場合のみで集計したのが、図表1-12である。4項目いずれも約4割が「所属する団体にある」と回答し、係や当番は約3割、役員も16.0%が「今年度関わった」としている。保護者の組織も母親たちの関与も、地域クラブではより多いことがわかる。

また子供の学年別にみると、高学年になるほど役員や係・当番を務めている比率が高くなる(図表1-13)。クラブ内で高学年の保護者により重要な役割が求められるケースが多いと考えられる。

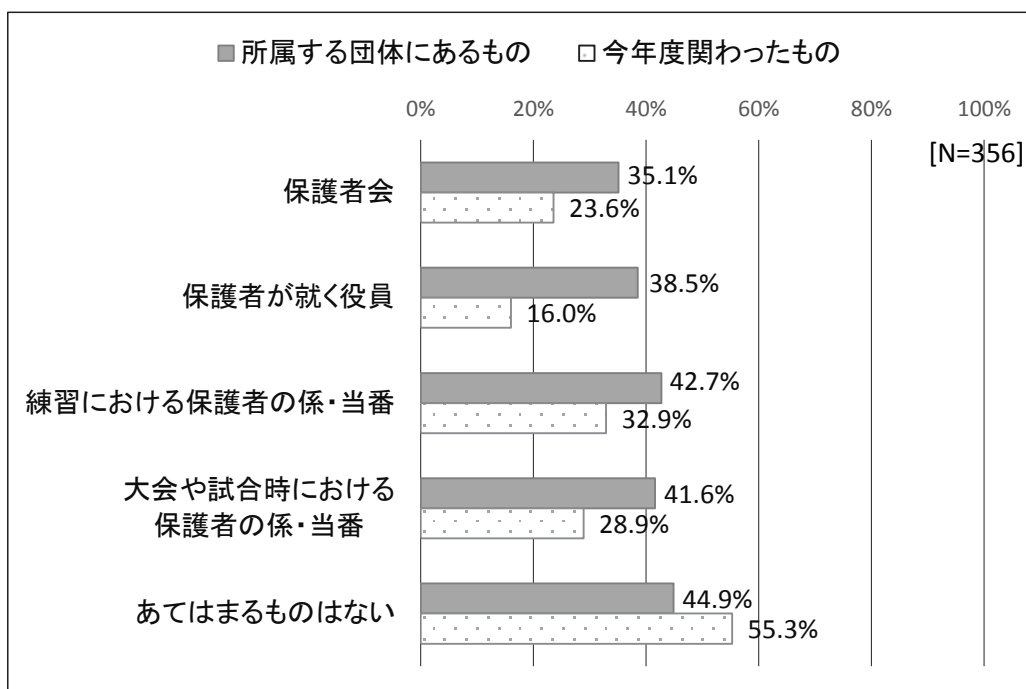
図表 1-11 所属する団体の保護者組織(スポーツ活動をしている子)



注 1) 複数回答。

注 2) 実際の設問では行っている種目ごとに尋ねている。複数の種目を行っている場合は、1つめに選んだ種目について集計をしている(2種目以降で集計しても傾向が変わらないことを確認している)。

図表 1-12 所属する団体の保護者組織(スポーツ活動をしている子・地域クラブのみ)



注1) 複数回答。

注2) 実際の設問では行っている種目ごとに尋ねている。複数の種目を行っている場合は、1つめに選んだ種目が地域クラブである場合について集計をしている(2種目め以降で集計しても傾向が変わらないことを確認している)。

図表 1-13 所属する団体の保護者組織(スポーツ活動をしている子・地域クラブのみ)

今年度ご自身が関わったもの	第1子学年					
	1年生 (39)	2年生 (54)	3年生 (69)	4年生 (68)	5年生 (64)	6年生 (62)
保護者会	12.8%	0.0%	14.5%	26.5%	37.5%	43.5%
保護者が就く役員	0.0%	1.9%	10.1%	13.2%	32.8%	30.6%
練習における保護者の係・当番	10.3%	18.5%	31.9%	30.9%	40.6%	54.8%
大会や試合時における保護者の係・当番	12.8%	9.3%	27.5%	26.5%	46.9%	41.9%
あてはまるものはない	79.5%	75.9%	60.9%	52.9%	39.1%	35.5%

注1) 複数回答。

注2) 実際の設問では行っている種目ごとに尋ねている。複数の種目を行っている場合は、1つめに選んだ種目が地域クラブである場合について集計をしている(2種目め以降で集計しても傾向が変わらないことを確認している)。

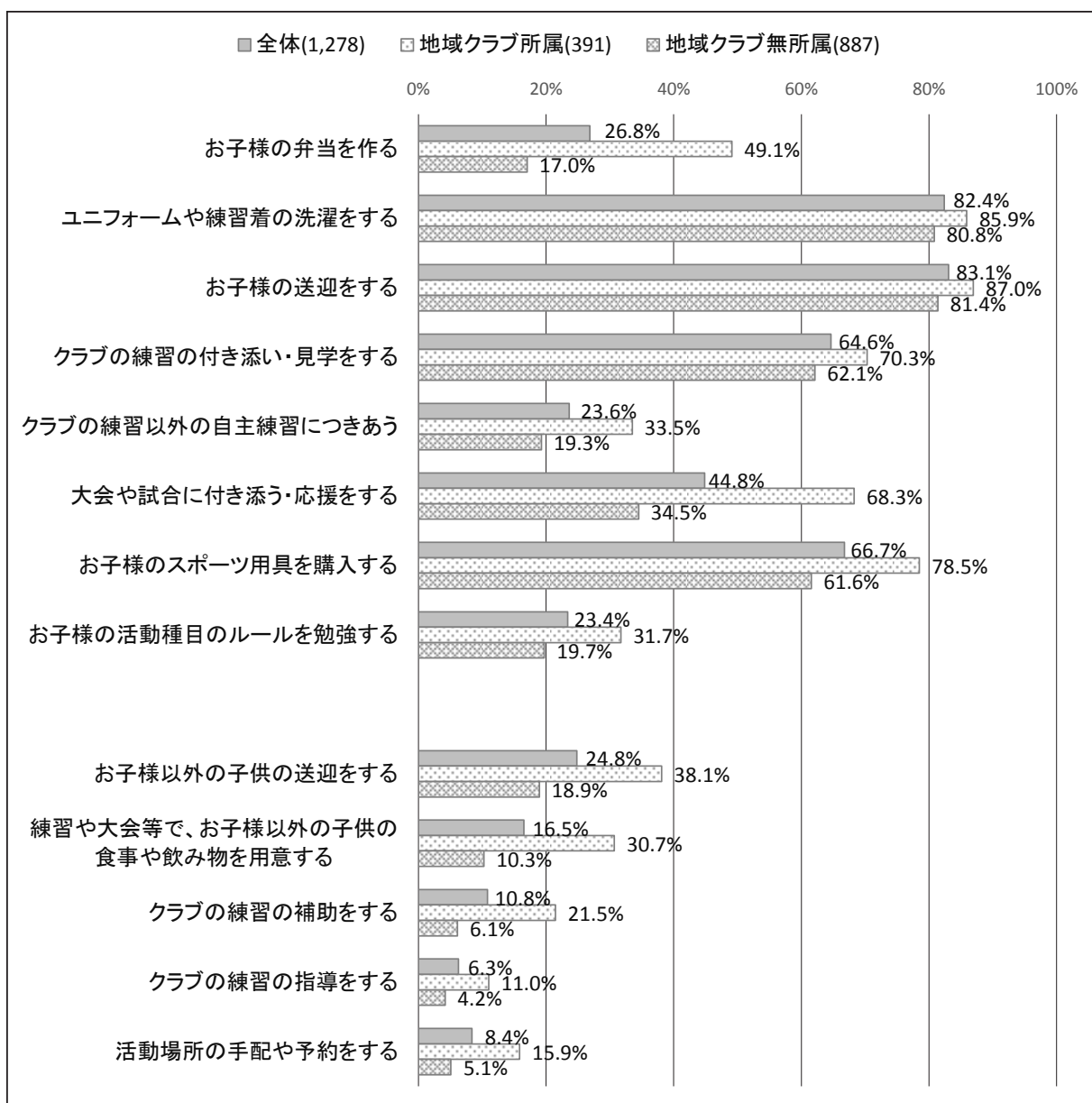
(3) 母親の関与・父親の関与

子供のスポーツ活動に対する、母親・父親の関与の実態を尋ねた。図表 1-14 が母親の関与、図表 1-15 が父親の関与である。両図をみると、まず全体的に母親のほうが関与の度合いが高いことがわかる。「お子様の弁当を作る」(母親 26.8%>父親 8.3%)や「ユニフォームや練習着の洗濯をする」(母親 82.4%>父親 17.6%)は、父親の数値を母親が大きく上回っている。これらは通常の家事の一部とも捉えられ、家事を主に担っている母親たちが行うことが多いものと推察される。ほかにも、「お子様の送迎をする」(母親 83.1%>父親 47.7%)、「クラブの練習の付き添い・見学をする」(母親 64.6%>父親 35.6%)、「お子様のスポーツ用具を購入する」(母親 66.7%>父親 32.6%)など、日常的な自分の子供に対する関与は、母親が主に担当していることがわかる。

一方で、「クラブの練習以外の自主練習につきあう」(母親 23.6%、父親 25.4%)、「クラブの練習の補助をする」(母親 10.8%、父親 9.9%)、「クラブの練習の指導をする」(母親 6.3%、父親 7.2%)などは、父親と母親の数値の差が小さい。

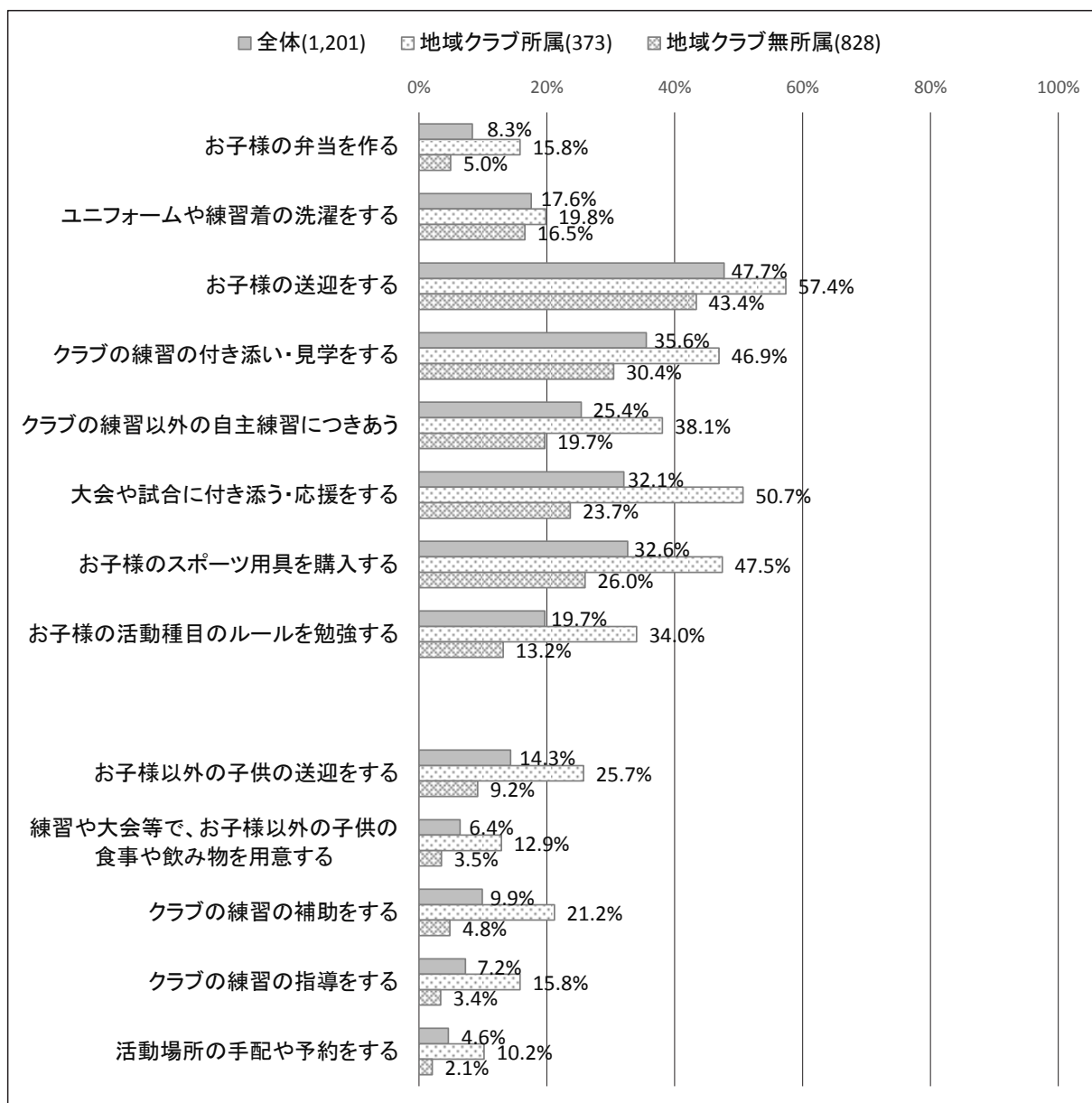
また地域クラブの所属有無別にみると、地域クラブに所属しているほうが保護者の関わりは多い。「お子様以外の子供の送迎」「お子様以外の子供の食事や飲み物の用意」といった、自分の子供以外に対する関与には母親の 3~4 割、「クラブの練習の補助」「クラブの練習の指導」「活動場所の手配や予約」といった、運営の補助にも母親・父親の 1~2 割が関わっている。

図表 1-14 母親の関与(スポーツ活動をしている子・全体、地域クラブ所属別)



注)「よくする」+「時々する」の%。

図表 1-15 父親の関与(スポーツ活動をしている子・全体、地域クラブ所属別)



注 1)「よくする」+「時々する」の%。

注 2)配偶者がいる人のみ回答。

保護者の関与について、子供の学年や性別に分析した。図表 1-16 は、母親の関与について学年別に集計した結果である。自分の子供に対する関与をみると、高学年では「お子様の弁当を作る」が多くなり、逆に低学年では「お子様の送迎をする」「クラブの練習の付き添い・見学をする」が多い。また、自分の子供以外に対する関与をみると、「お子様以外の子供の送迎」「お子様以外の子供の食事や飲み物を用意」「活動場所の手配や予約」は、特に 6 年生で数値が高くなっている。

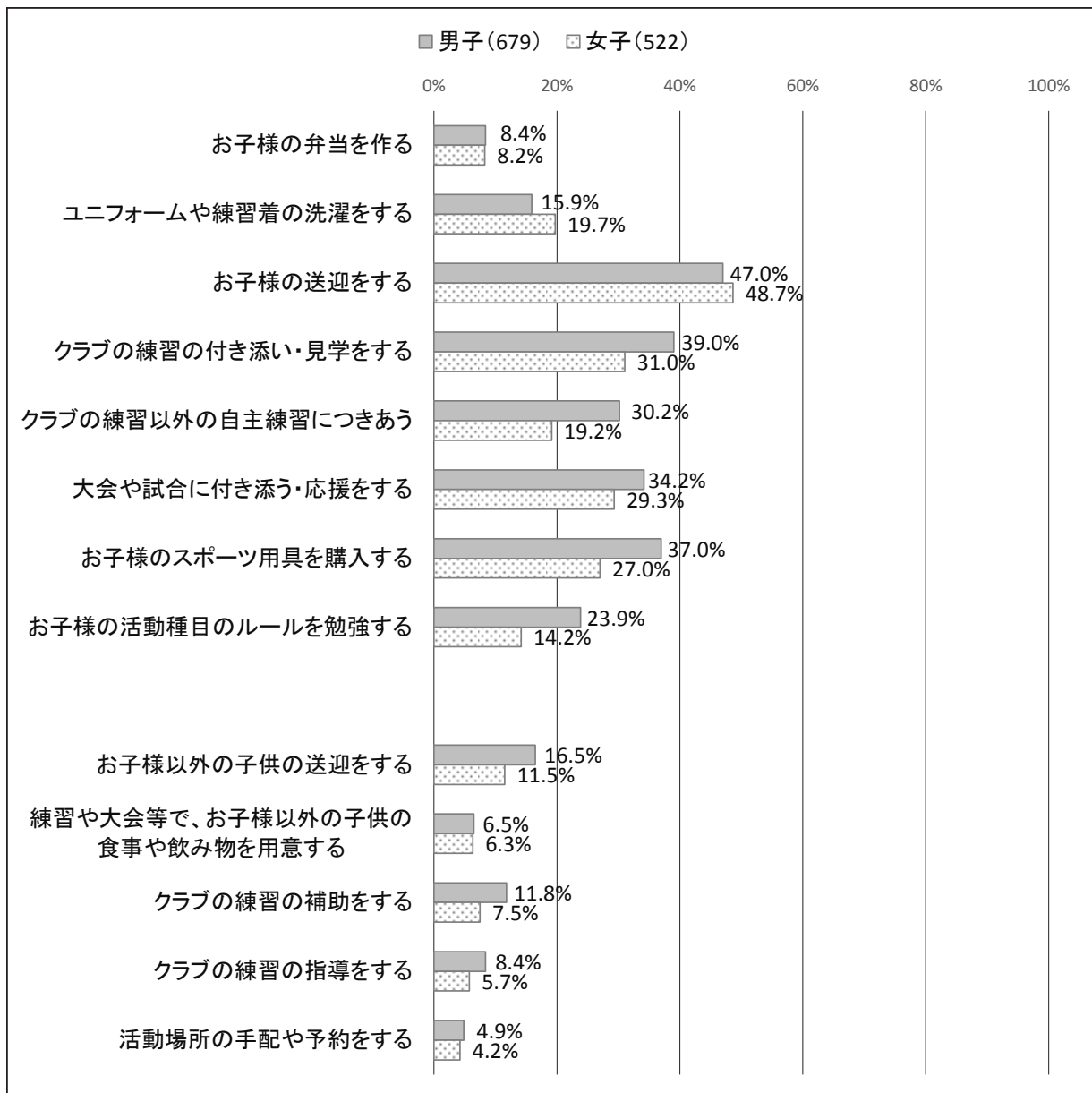
性別では、男子の場合は女子に比べて父親の関与が多い(図表 1-17)。特に、「クラブの練習の付き添い・見学」「クラブの練習以外の自主練習につきあう」「大会や試合に付き添う・応援」「お子様の活動種目のルールを勉強」は、母親の関与(図表は割愛)では男女差がみられなかった項目であるが、父親の関与ではすべて男子のほうが女子よりも 5 ポイント以上高くなっている。

図表 1-16 母親の関与(スポーツをしている子・学年別)

	1年生 (395)	2年生 (394)	3年生 (397)	4年生 (396)	5年生 (392)	6年生 (394)
【自分の子供に対して】						
お子様の弁当を作る	13.7%	18.1%	21.5%	< 30.9%	< 37.7%	41.6%
ユニフォームや練習着の洗濯をする	84.0%	81.4%	80.3%	83.3%	80.9%	84.9%
お子様の送迎をする	91.5%	86.9%	86.5%	» 75.1%	< 80.9%	77.3%
クラブの練習の付き添い・見学をする	81.6%	» 71.5%	66.8%	» 54.5%	59.3%	> 53.0%
クラブの練習以外の自主練習につきあう	22.2%	24.0%	22.9%	23.2%	27.0%	22.7%
大会や試合に付き添う・応援をする	30.2%	< 35.7%	< 43.5%	47.2%	« 60.3%	> 54.1%
お子様のスポーツ用具を購入する	66.0%	> 59.7%	< 65.9%	66.5%	69.1%	< 74.6%
お子様の活動種目のルールを勉強する	18.9%	< 26.2%	27.4%	> 21.5%	24.0%	22.2%
【自分の子供以外に対して】						
お子様以外の子供の送迎をする	17.9%	22.2%	< 29.1%	> 22.7%	26.5%	31.4%
練習や大会等で、お子様以外の子供の食事や飲み物を用意する	10.8%	12.7%	< 17.9%	15.0%	18.6%	< 25.4%
クラブの練習の補助をする	7.5%	9.0%	12.1%	12.4%	11.3%	12.4%
クラブの練習の指導をする	6.1%	8.1%	5.4%	5.2%	5.9%	7.0%
活動場所の手配や予約をする	5.2%	9.0%	8.5%	7.3%	6.9%	< 14.1%

注)「よくする」+「時々する」の%。

図表 1-17 父親の関与(スポーツをしている子・性別)



注 1)「よくする」+「時々する」の%。

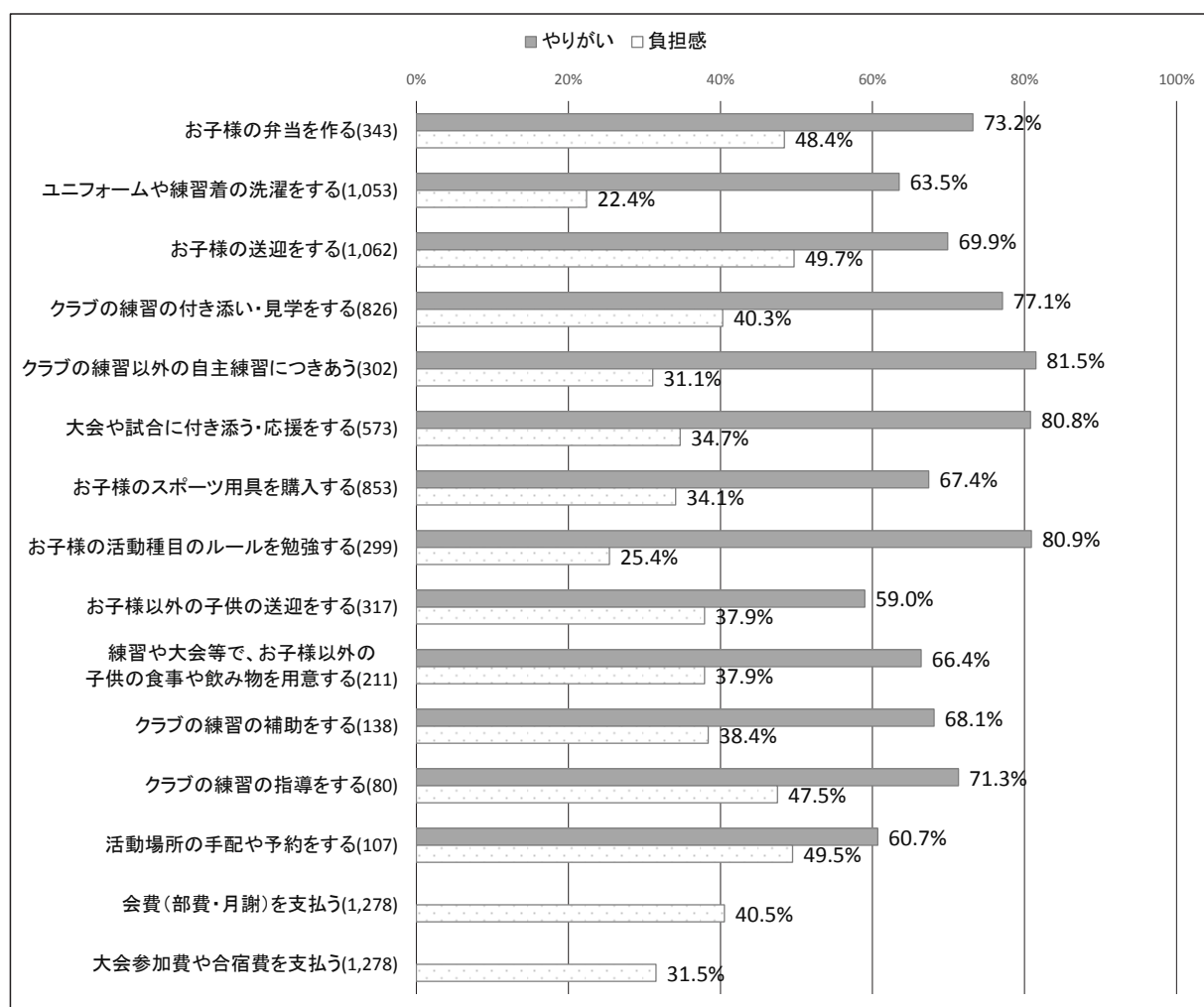
注 2)配偶者がいる人のみ回答。

(4) 母親のやりがい・負担感

具体的な母親の関与について、それぞれ「よくする」「時々する」と回答した人が、どれぐらいやりがいや負担を感じているのか尋ねた(図表 1-18)。図をみると、多くの母親がスポーツ活動への関与にやりがいを感じていることがわかる。特に高いのは、「クラブの練習以外の自主練習につきあう」(81.5%)、「大会や試合に付き添う・応援をする」(80.8%)、「お子様の活動種目のルールを勉強する」(80.9%)で、いずれも 8 割を超えている。最も低いのは「お子様以外の子供の送迎をする」で、59.0%であった。親の役割にとどまらず、スポーツそのものを楽しめる活動は、母親のやりがいも特に高いようである。

一方、負担感が高いのは、「お子様の送迎をする」(49.7%)、「活動場所の手配や予約をする」(49.5%)などであった。また、全員に尋ねた「会費(部費・月謝)を支払う」を「負担に感じる」のは 40.5%、「大会参加費や合宿費を支払う」では 31.5%であった。

図表 1-18 母親のやりがい・負担感(スポーツ活動をしている子)



注1) 「やりがい」は「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」の%。「負担感」は「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」の%。

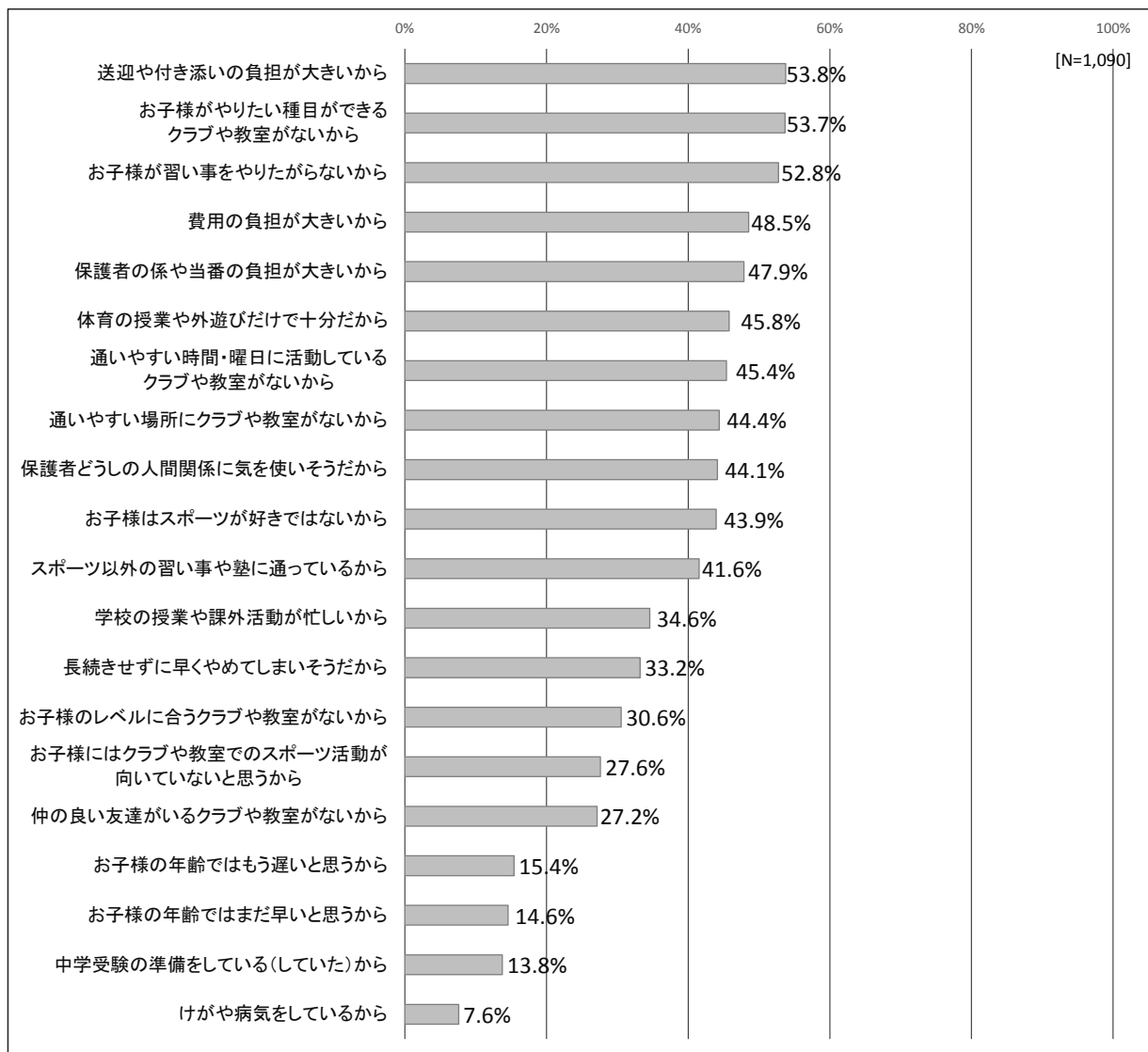
注2) 上から 13 項目に関しては、それぞれの支援を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

2. 3 スポーツ活動をしていない子供の家庭

(1) スポーツ活動をしない理由

スポーツ活動をしていない場合に、その理由を尋ねた(図表 1-21)。全体では、「送迎や付き添いの負担が大きいため」(53.8%)、「お子様がやりたい種目ができるクラブや教室がないから」(53.7%)、「お子様が習い事をやりたがらないから」(52.8%)の3つが半数を超えていた。さらに「費用の負担が大きいため」(48.5%)、「保護者の係や当番の負担が大きいため」(47.9%)が続き、保護者の負担に関わる理由が上位にあがっていることがわかる。

図表 1-21 スポーツ活動をしない理由(スポーツ活動をしていない子)



注) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

続いて、スポーツ活動をしない理由を子供の性・学年別にみた(図表 1-22)。まず、性別にかかわらず低学年では保護者の負担、高学年では子供自身の意向やスポーツ以外の活動をしていることが理由の上位にあがっている。たとえば、1・2年生(男女)、および3年生女子ではいずれも「送迎や付き添いの負担が大きいから」が最多で、特に2・3年生の女子では7割近くに達している。しかし高学年では数値が下がり、6年生では男女ともに約4割である。それに対して、高学年では「お子様が習い事をやりたがらないから」「お子様がやりたい種目ができるクラブや教室がないから」といった項目が上位にあがっている。「お子様はスポーツが好きではないから」も、1年生では男女ともに3割台だが、2年生以降4割台になり、5・6年生の女子では5割を超えている。また、女子の低中学年では「体育の授業や外遊びだけで十分だから」が高く、5～6割程度みられる。一方で、1年生の男子では30.9にとどまる。

年齢に関する意識を見ると、1年生は「お子様の年齢ではまだ早いと思うから」が男子で27.2%、女子で32.4%となっている。「お子様の年齢ではもう遅いと思うから」は、男子では4年生から1割を超え、6年生では25.9%である。女子では2年生以上のすべての学年で、1～2割が「あてはまる」としている。

図表 1-22 スポーツ活動をしない理由(性・学年別)

男子

	N=81	1年生
送迎や付き添いの負担が大きいか	55.6%	
保護者の係や当番の負担が大きいか	53.1%	
通いやすい場所にクラブや教室がないから	51.9%	
お子様が習い事をやられたがらないから	51.9%	
費用の負担が大きいか	50.6%	
保護者どうしの人間関係に気を使いたいから	48.1%	
通いやすい場所にクラブや教室がないから	45.7%	
長続きせずに早くやめてしまいたいから	42.0%	
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから	39.5%	
お子様がスポーツが好きではないから	35.8%	
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから	35.8%	
体育の授業や外遊びだけで十分だから	30.9%	
お子様にはクラブや教室でスポーツ活動が向いていないと思うから	30.9%	
学校の授業や課外活動が忙しいから	27.2%	
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから	25.9%	
お子様の年齢ではまだ早いと思うから	23.5%	
けがや病気をしているから	7.4%	
けがや病気をしているから	7.4%	
中学受験の準備をしている(していた)から	6.2%	

女子

	N=102	1年生
送迎や付き添いの負担が大きいか	59.8%	
通いやすい場所にクラブや教室がないから	57.8%	
体育の授業や外遊びだけで十分だから	54.9%	
お子様がやりたい種目ができないクラブや教室がないから	54.9%	
費用の負担が大きいか	54.9%	
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから	52.0%	
保護者の係や当番の負担が大きいか	50.0%	
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから	47.1%	
お子様が習い事をやられたがらないから	42.2%	
保護者どうしの人間関係に気を使いたいから	41.2%	
学校の授業や課外活動が忙しいから	36.3%	
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから	34.3%	
お子様の年齢ではまだ早いと思うから	32.4%	
長続きせずに早くやめてしまいたいから	32.4%	
お子様がスポーツが好きではないから	31.4%	
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから	31.4%	
お子様にはクラブや教室でスポーツ活動が向いていないと思うから	24.5%	
お子様の年齢ではもう遅いと思うから	7.8%	
けがや病気をしているから	6.9%	
けがや病気をしているから	6.9%	
中学受験の準備をしている(していた)から	6.9%	

	N=74	2年生
送迎や付き添いの負担が大きいか	64.9%	
お子様がやりたい種目ができないクラブや教室がないから	59.5%	
お子様が習い事をやられたがらないから	58.1%	
保護者の係や当番の負担が大きいか	52.7%	
費用の負担が大きいか	51.4%	
保護者どうしの人間関係に気を使いたいから	50.0%	
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから	47.3%	
通いやすい場所にクラブや教室がないから	44.6%	
体育の授業や外遊びだけで十分だから	41.9%	
お子様がスポーツが好きではないから	41.9%	
長続きせずに早くやめてしまいたいから	41.9%	
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから	31.1%	
お子様にはクラブや教室でスポーツ活動が向いていないと思うから	25.7%	
学校の授業や課外活動が忙しいから	24.3%	
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから	20.3%	
お子様の年齢ではまだ早いと思うから	18.9%	
お子様の年齢ではもう遅いと思うから	17.6%	
けがや病気をしているから	12.2%	
お子様の年齢ではもう遅いと思うから	9.5%	
中学受験の準備をしている(していた)から	2.7%	

	N=99	2年生
送迎や付き添いの負担が大きいか	67.7%	
費用の負担が大きいか	54.5%	
保護者の係や当番の負担が大きいか	54.5%	
体育の授業や外遊びだけで十分だから	49.5%	
お子様がやりたい種目ができないクラブや教室がないから	48.5%	
お子様が習い事をやられたがらないから	47.5%	
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから	46.5%	
通いやすい場所にクラブや教室がないから	46.5%	
お子様がスポーツが好きではないから	44.4%	
お子様がやりたい種目ができないクラブや教室がないから	43.4%	
学校の授業や課外活動が忙しいから	40.4%	
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから	38.4%	
お子様の年齢ではまだ早いと思うから	33.3%	
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから	28.3%	
お子様にはクラブや教室でスポーツ活動が向いていないと思うから	28.3%	
お子様の年齢ではまだ早いと思うから	27.3%	
お子様の年齢ではもう遅いと思うから	21.2%	
お子様の年齢ではもう遅いと思うから	18.2%	
中学受験の準備をしている(していた)から	10.1%	
けがや病気をしているから	10.1%	

	N=72	3年生
お子様が習い事をやられたがらないから	61.1%	
お子様がやりたい種目ができないクラブや教室がないから	47.2%	
送迎や付き添いの負担が大きいか	47.2%	
保護者の係や当番の負担が大きいか	45.8%	
お子様がスポーツが好きではないから	44.4%	
保護者どうしの人間関係に気を使いたいから	44.4%	
体育の授業や外遊びだけで十分だから	44.4%	
費用の負担が大きいか	40.3%	
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから	37.5%	
長続きせずに早くやめてしまいたいから	33.3%	
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから	29.2%	
通いやすい場所にクラブや教室がないから	26.4%	
お子様にはクラブや教室でスポーツ活動が向いていないと思うから	25.0%	
お子様にはクラブや教室でスポーツ活動が向いていないと思うから	25.0%	
学校の授業や課外活動が忙しいから	22.2%	
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから	19.4%	
お子様の年齢ではまだ早いと思うから	6.9%	
お子様の年齢ではもう遅いと思うから	6.9%	
けがや病気をしているから	5.6%	
中学受験の準備をしている(していた)から	4.2%	

	N=102	3年生
送迎や付き添いの負担が大きいか	67.6%	
お子様がやりたい種目ができないクラブや教室がないから	63.7%	
費用の負担が大きいか	62.7%	
保護者の係や当番の負担が大きいか	60.8%	
体育の授業や外遊びだけで十分だから	57.8%	
保護者どうしの人間関係に気を使いたいから	53.9%	
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから	52.0%	
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから	51.0%	
お子様が習い事をやられたがらないから	50.0%	
通いやすい場所にクラブや教室がないから	49.0%	
長続きせずに早くやめてしまいたいから	45.1%	
お子様がスポーツが好きではないから	42.2%	
学校の授業や課外活動が忙しいから	38.2%	
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから	35.3%	
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから	29.4%	
お子様にはクラブや教室でスポーツ活動が向いていないと思うから	28.4%	
お子様の年齢ではまだ早いと思うから	16.7%	
中学受験の準備をしている(していた)から	13.7%	
お子様の年齢ではもう遅いと思うから	11.8%	
けがや病気をしているから	6.9%	

男子

	N=71	4年生
お子様が習い事をやりたい種目ができるクラブや教室がないから		59.2%
お子様がやりたい種目をやりたいから		57.7%
送迎や付き添いの負担が大きいか		53.5%
保護者の係や当番の負担が大きいか		53.5%
保護者どうしの人間関係に気を遣いそうだから		52.1%
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから		50.7%
お子様がスポーツが好きではないから		49.3%
通いやすい場所にクラブや教室がないから		49.3%
費用の負担が大きいか		47.9%
体育の授業や外遊びだけで十分だから		42.3%
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから		40.8%
学校の授業や課外活動が忙しいから		38.0%
長続きせずに早くやめてしまいたいから		38.0%
お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いているから		35.2%
お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから		33.8%
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから		23.9%
お子様の年齢ではもう遅いと思うから		19.7%
中学受験の準備をしている(している)から		16.9%
お子様の年齢ではまだ早いと思うから		12.7%
けがや病気をしているから		4.2%

	N=75	5年生
お子様が習い事をやりたい種目ができないから		56.0%
お子様がやりたい種目をやりたいから		50.7%
送迎や付き添いの負担が大きいか		44.0%
保護者の係や当番の負担が大きいか		44.0%
保護者どうしの人間関係に気を遣いそうだから		42.7%
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから		41.3%
お子様がスポーツが好きではないから		37.3%
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから		36.0%
保護者どうしの人間関係に気を遣いそうだから		36.0%
通いやすい場所にクラブや教室がないから		34.7%
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから		34.7%
学校の授業や課外活動が忙しいから		32.0%
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから		29.3%
費用の負担が大きいか		28.0%
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから		26.7%
お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから		26.7%
中学受験の準備をしている(している)から		22.7%
長続きせずに早くやめてしまいたいから		22.0%
お子様の年齢ではもう遅いと思うから		16.0%
お子様の年齢ではまだ早いと思うから		5.3%
けがや病気をしているから		5.3%

	N=85	6年生
お子様が習い事をやりたい種目ができないから		56.5%
お子様がやりたい種目をやりたいから		49.4%
送迎や付き添いの負担が大きいか		49.4%
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから		44.7%
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから		43.5%
通いやすい場所にクラブや教室がないから		43.5%
お子様がスポーツが好きではないから		41.2%
費用の負担が大きいか		40.0%
送迎や付き添いの負担が大きいか		40.0%
保護者の係や当番の負担が大きいか		37.6%
学校の授業や課外活動が忙しいから		36.5%
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから		31.8%
長続きせずに早くやめてしまいたいから		31.8%
保護者どうしの人間関係に気を遣いそうだから		29.4%
お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから		28.2%
お子様の年齢ではもう遅いと思うから		25.9%
中学受験の準備をしている(している)から		23.5%
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから		23.5%
けがや病気をしているから		8.2%
お子様の年齢ではまだ早いと思うから		7.1%

女子

	N=92	4年生
お子様が習い事をやりたい種目ができるクラブや教室がないから		58.7%
送迎や付き添いの負担が大きいか		57.6%
費用の負担が大きいか		55.4%
お子様が習い事をやりたいから		53.3%
送迎や付き添いの負担が大きいか		52.2%
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから		51.1%
体育の授業や外遊びだけで十分だから		47.8%
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから		45.7%
保護者どうしの人間関係に気を遣いそうだから		45.7%
保護者の係や当番の負担が大きいか		44.6%
お子様がスポーツが好きではないから		41.3%
学校の授業や課外活動が忙しいから		39.1%
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから		29.3%
長続きせずに早くやめてしまいたいから		28.3%
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから		25.0%
中学受験の準備をしている(している)から		20.7%
お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから		19.6%
お子様の年齢ではもう遅いと思うから		14.1%
お子様の年齢ではまだ早いと思うから		8.7%
けがや病気をしているから		5.4%

	N=113	5年生
お子様が習い事をやりたい種目ができないから		54.0%
お子様がやりたい種目をやりたいから		51.3%
送迎や付き添いの負担が大きいか		50.4%
費用の負担が大きいか		48.7%
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから		46.0%
送迎や付き添いの負担が大きいか		44.2%
保護者の係や当番の負担が大きいか		43.4%
費用の負担が大きいか		41.0%
保護者どうしの人間関係に気を遣いそうだから		40.7%
学校の授業や課外活動が忙しいから		37.2%
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから		36.3%
通いやすい場所にクラブや教室がないから		34.6%
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから		27.4%
長続きせずに早くやめてしまいたいから		26.6%
お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから		25.7%
お子様の年齢ではもう遅いと思うから		24.8%
お子様の年齢ではまだ早いと思うから		20.4%
中学受験の準備をしている(している)から		18.0%
お子様の年齢ではまだ早いと思うから		8.0%
けがや病気をしているから		7.1%

	N=124	6年生
お子様が習い事をやりたい種目ができないから		55.6%
お子様がやりたい種目をやりたいから		54.0%
送迎や付き添いの負担が大きいか		52.4%
費用の負担が大きいか		50.8%
スポーツ以外の習い事や塾に通っているから		46.8%
送迎や付き添いの負担が大きいか		46.0%
体育の授業や外遊びだけで十分だから		43.5%
通いやすい時間・曜日に活動しているクラブや教室がないから		41.9%
学校の授業や課外活動が忙しいから		41.9%
保護者どうしの人間関係に気を遣いそうだから		41.1%
保護者の係や当番の負担が大きいか		40.3%
保護者どうしの人間関係に気を遣いそうだから		37.1%
お子様のレベルに合うクラブや教室がないから		31.5%
お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから		30.6%
長続きせずに早くやめてしまいたいから		29.0%
仲の良い友達がいるクラブや教室がないから		29.0%
お子様の年齢ではもう遅いと思うから		22.6%
中学受験の準備をしている(している)から		16.1%
けがや病気をしているから		10.5%
お子様の年齢ではまだ早いと思うから		9.7%

注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。各カテゴリで降順に並び替えている。

保護者の負担に関わる項目について世帯年収別に分析すると、「費用の負担が大きいから」(400万円未満 61.6% > 800万円以上 26.8%、以下同)で特に大きい差がみられた(図表 1-23)。また、「送迎や付き添いの負担が大きいから」(61.9% > 39.4%)、「保護者の係や当番の負担が大きいから」(58.5% > 33.1%)、「保護者どうしの人間関係に気を使いそうだから」(52.0% > 30.3%)でも差がみられ、保護者の負担感は家庭の経済状況や保護者の生活の事情などに影響を受けていると考えられる。

図表 1-23 スポーツ活動をしらない理由(世帯年収別)

	世帯年収			
	400万円未満 (294)	400万円～ 600万円未満 (288)	600万円～ 800万円未満 (185)	800万円以上 (142)
費用の負担が大きいから	61.6%	> 52.4%	≫ 41.1%	≫ 26.8%
送迎や付き添いの負担が大きいから	61.9%	> 57.3%	> 51.4%	≫ 39.4%
保護者の係や当番の負担が大きいから	58.5%	≫ 48.3%	> 41.1%	> 33.1%
保護者どうしの人間関係に気を使いそうだから	52.0%	> 46.9%	> 37.3%	> 30.3%

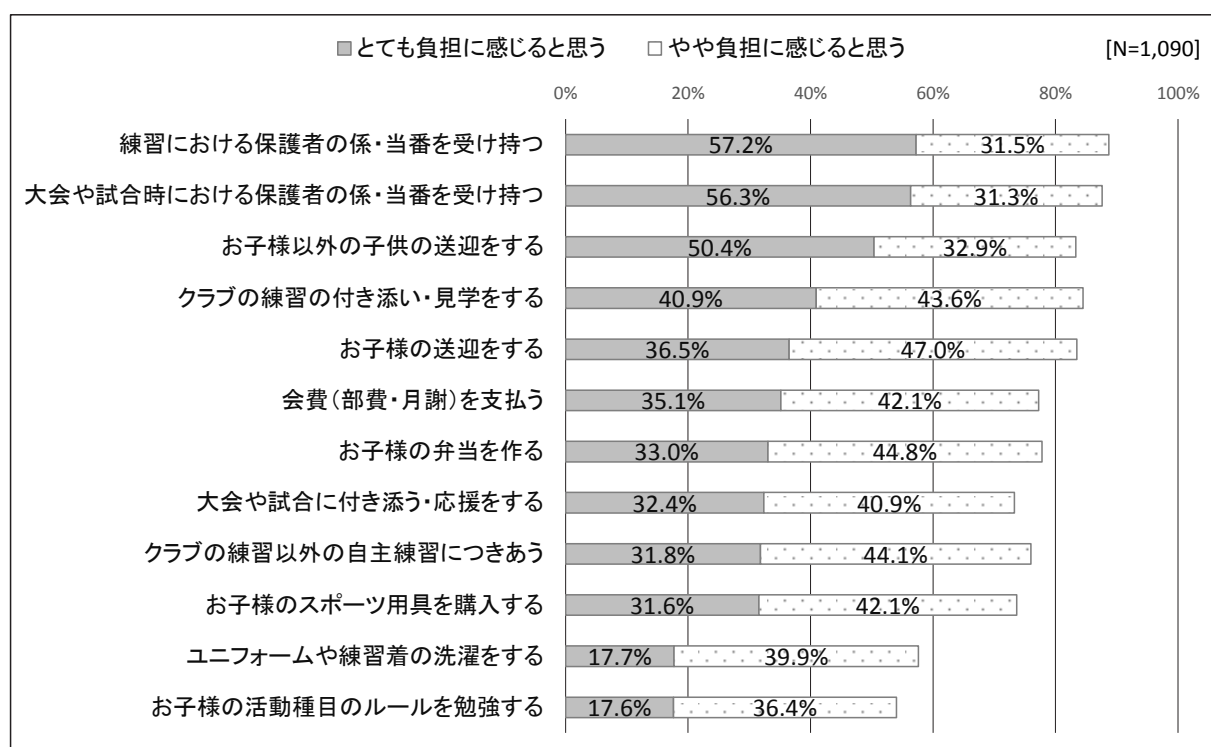
注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

(2) 母親の負担感

現在スポーツ活動をしていない場合に、「もしこれからお子様が団体(クラブ・教室等)に所属してスポーツ活動をするようになったら、あなたご自身はどれくらい負担を感じると思いますか」と、状況を想定した質問をした(図表 1-24)。全体的に「負担に感じると思う」という回答が多かったが、特に「練習における保護者の係・当番を受け持つ」「大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ」は「とても負担に感じると思う」だけで 6 割近くになった。負担感が少ないのは「ユニフォームや練習着の洗濯をする」「お子様の活動種目のルールを勉強する」で、「とても負担に感じると思う」は 1 割台であった。

図表は割愛しているが、性・学年別にみると、低学年男子では「とても負担に感じると思う」が他の性・学年よりも高い項目が多かった。

図表 1-24 母親の負担感(スポーツ活動をしていない子)



最後に、スポーツ活動をやめた理由を確認した(図表 1-25)。この質問は、小学生のうちに「以前はしていたが、今は行っていない」種目がある場合に尋ねているので、現在別のスポーツ活動を行っている子と、今は何も行っていない子の両方の母親が回答対象に含まれている。

理由として多いのは、「お子様がやめたがっていたから」(35.5%)、「目標を達成したから」(34.6%)、「スポーツ以外の習い事や塾に通うことになったから」(32.6%)である。また、学年別にみると、「通いづらい場所にあったから」(1年生 33.3% > 6年生 17.4%)は低学年のほうが多い。逆に高学年ほど多くなる理由としては、「目標を達成したから」(1年生 14.5% < 6年生 47.5%)、「スポーツ以外の習い事や塾に通うことになったから」(1年生 23.1% < 6年生 39.7%)などがある。

図表 1-25 スポーツ活動をやめた理由(全体、学年別)

	全体 (960)	1年生 (117)	2年生 (119)	3年生 (136)	4年生 (177)	5年生 (192)	6年生 (219)
活動できる場がなくなったから (ご自宅の転居やクラブの廃止など)	23.5%	25.6%	30.3%	< 24.3%	27.1%	> 19.3%	19.2%
通いづらい場所にあったから	26.5%	33.3%	< 38.7%	» 26.5%	31.1%	» 20.8%	17.4%
お子様のレベルに合わなかったから	22.3%	20.5%	24.4%	24.3%	25.4%	> 18.8%	21.5%
指導者や指導方法が合わなかったから	18.2%	18.8%	21.8%	16.9%	< 23.2%	> 14.6%	16.0%
目標を達成したから	34.6%	14.5%	« 25.2%	27.2%	< 36.2%	< 41.7%	< 47.5%
お子様が他のスポーツに興味をもったから	28.1%	23.9%	26.1%	30.9%	29.4%	30.2%	26.9%
スポーツ以外の習い事や塾に通うことになったから	32.6%	23.1%	22.7%	< 32.4%	34.5%	34.9%	39.7%
学校の授業や課外活動が忙しくなったから	26.5%	25.6%	24.4%	> 18.4%	< 27.1%	28.6%	30.6%
中学受験の準備を始めたから	11.8%	1.7%	< 8.4%	5.9%	< 12.4%	< 17.7%	16.9%
お子様がやめたがっていたから	35.5%	27.4%	« 39.5%	36.0%	38.4%	> 33.3%	37.0%
けがや病気で続けられなくなったから	6.6%	4.3%	< 10.1%	> 3.7%	< 9.6%	> 4.2%	7.3%
費用の負担が大きかったから	18.0%	17.9%	21.0%	> 14.7%	< 22.0%	> 15.1%	17.8%
送迎や付き添いの負担が大きかったから	26.1%	26.5%	< 32.8%	> 27.2%	27.7%	26.6%	> 20.1%
保護者の係や当番の負担が大きかったから	10.5%	10.3%	14.3%	> 6.6%	10.2%	12.5%	9.6%

注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

以上、スポーツ活動をしていない子供の家庭の様子を確認した。子供がスポーツ活動をしていない背景に、保護者の負担感がある。特に低学年では、子供の意思や志向が理由となる家庭が高学年に比べて少ないだけに、環境の整備や保護者負担の軽減が進むことで、スポーツ活動に参加させやすくなる家庭があるのではないだろうか。

2. 4 子供のスポーツ環境に対する意識

(1) 満足度

子供のスポーツ環境や体力・運動能力に対する満足度を尋ねた(図表 1-26)。まず指摘しておきたいのが、現在スポーツ活動をしていない場合の「わからない」の比率の高さである。特に「お住まいの地域で開かれる運動会・スポーツ体験教室など」(60.2%)、「お住まいの地域のスポーツ施設」(49.4%)で「わからない」が多かった。もともとスポーツへの関心が低い保護者はそうした情報に接していないのかもしれないが、公共施設や体験会などの情報は本来、スポーツ活動に積極的に取り組みづらい親子にこそリーチする意義があると考えられる。行政や主催者もWebサイトや広報誌、学校を通じた配布等で告知を積極的に行っているものの、それでも受け手である母親がこのような状況である点は、今後も検討が必要な課題であるといえよう。

一方で、スポーツ活動をしている場合は、「わからない」の比率も低い。「とても満足している」+「まあ満足している」の数値をみると、「お子様の通っているスポーツ教室・クラブ等」(83.0%)が最も高く、他は「お住まいの地域の遊び場」(59.5%)、「お子様の体力・運動能力」(55.4%)、「お住まいの地域のスポーツ施設」(53.3%)、「お住まいの地域で開かれる運動会・スポーツ体験教室など」(46.5%)の順であった。

図表 1-26 満足度(全体、スポーツ活動の有無別)

		全体 (2,368)	スポーツ活動	
			有(1,278)	無(1,090)
お子様の通っているスポーツ教室・ クラブ等	とても満足している	/	11.7%	/
	まあ満足している		71.3%	
	あまり満足していない		12.2%	
	全く満足していない		1.8%	
	わからない		3.0%	
お住まいの地域の遊び場 (公園、広場など)	とても満足している	4.6%	6.0%	2.9%
	まあ満足している	42.1%	53.5%	28.6%
	あまり満足していない	24.6%	29.0%	19.4%
	全く満足していない	8.1%	7.7%	8.4%
	わからない	20.7%	3.8%	40.6%
お住まいの地域のスポーツ施設 (プール、体育館など)	とても満足している	3.6%	5.1%	1.9%
	まあ満足している	35.7%	48.2%	21.0%
	あまり満足していない	26.1%	31.6%	19.7%
	全く満足していない	8.2%	8.5%	7.9%
	わからない	26.3%	6.6%	49.4%
お住まいの地域で開かれる運動会・ スポーツ体験教室など	とても満足している	2.7%	4.1%	0.9%
	まあ満足している	29.7%	42.4%	14.8%
	あまり満足していない	25.1%	32.3%	16.7%
	全く満足していない	7.7%	8.0%	7.4%
	わからない	34.8%	13.1%	60.2%
お子様の体力・運動能力	とても満足している	4.4%	6.3%	2.3%
	まあ満足している	39.0%	49.1%	27.2%
	あまり満足していない	32.9%	35.1%	30.4%
	全く満足していない	7.9%	7.1%	8.7%
	わからない	15.8%	2.4%	31.4%

(2) スポーツ環境に対する意見

「次のようなAとBの2つの意見について、あなたの考えに近いのはどちらですか」という形で、スポーツ環境に対する意見を尋ねた(図表 1-27)。順番にみていくと、小学生の子供の競技に対する取り組み方としては、「多様な競技に取り組むことが望ましい」が多数派で、72.2%('Bに近い'+「どちらかといえばBに近い」、以下同)であった。子供のスポーツ指導においては、「技術の習得を重視すべきだ」(15.9%)よりも「楽しさを味わうことを重視すべきだ」(84.1%)が多数派であった。

体罰については、「いかなる理由でも、指導者による体罰はやめたほうがよい」が73.6%、「やむを得ない場合であれば、指導者による体罰があってもよい」は26.4%であった。保護者の間でも4分の1程度、体罰容認派がいる点は注目されるが、保護者によって「やむを得ない場合」や「体罰」の想定する内容が異なることが予想され、質的な調査などで考察を補完する必要があるだろう。

最後に、「子供のスポーツ環境はなるべく国や自治体が整備するのが望ましい」は52.5%、「子供のスポーツ環境は民間が積極的に参入して整備するのが望ましい」は47.4%で、差は小さかった。

図表 1-27 スポーツ環境に対する意見

		全体 (2,368)
A: 子供が小学生のうちから、1つの競技に専念することが望ましい	Aに近い	4.5%
	どちらかといえばAに近い	23.4%
B: 子供が小学生のうちから、多様な競技に取り組むことが望ましい	どちらかといえばBに近い	56.0%
	Bに近い	16.2%
A: 子供のスポーツ指導においては、楽しさを味わうことを重視すべきだ	Aに近い	24.7%
	どちらかといえばAに近い	59.4%
B: 子供のスポーツ指導においては、技術の習得を重視すべきだ	どちらかといえばBに近い	13.7%
	Bに近い	2.2%
A: やむを得ない場合であれば、指導者による体罰があってもよい	Aに近い	2.1%
	どちらかといえばAに近い	24.3%
B: いかなる理由でも、指導者による体罰はやめたほうがよい	どちらかといえばBに近い	41.1%
	Bに近い	32.5%
A: 子供のスポーツ環境はなるべく国や自治体が整備するのが望ましい	Aに近い	7.1%
	どちらかといえばAに近い	45.4%
B: 子供のスポーツ環境は民間が積極的に参入して整備するのが望ましい	どちらかといえばBに近い	41.8%
	Bに近い	5.6%

以上、子供のスポーツ環境に対する意識の調査結果を確認した。組織でスポーツをするのが難しくても、地域の遊び場や施設を利用して、個人や家族でスポーツを楽しむことはできる。しかし、スポーツ活動をしていない子供の場合、母親のそうした場に対する認知・関心が低い。保護者の余裕や関心がない家庭であっても、子供が地域でスポーツを楽しむことができる条件を明らかにすることが、今後の研究上の課題といえるだろう。

3. 結果のまとめ

以上、調査結果を主な調査項目ごとに整理した。最後に、①学年別 ②世帯年収別に特徴的な調査結果をまとめ、課題を指摘したい。

① 学年別

現在子供が行っているスポーツ活動の具体的な種目(図表 1-2)、種目数(図表 1-4)、所属する団体の種類(図表 1-8)をもとに小学生のスポーツ活動を概観すると、1・2年生では民間のスイミング・体操教室などに通うケースが多く、3・4年生になるとその他の種目を地域クラブで行うケースも増えてくる。そして、5・6年生になると、一定数の子供がスポーツ活動から離れる様子が浮かび上がる。母親の関与については、「お子様の送迎をする」「クラブの練習の付き添い・見学をする」などは低学年ほど多く、「お子様以外の子供の送迎」「活動場所の手配や予約」などは6年生で特に多かった(図表 1-16)。

一方で、スポーツ活動に参加しない理由は、低学年では保護者の負担、高学年では子供自身の意向やスポーツ以外の活動をしていることが上位にあがっていた(図表 1-22)。また図表は割愛しているが、「送迎や付き添いの負担」は未就学児の有無別にも差がみられた。家庭によっては、低学年の第1子と未就学児のきょうだいを連れて行動するケースもあり、そうした点で負担感が強くなる可能性もある。

②世帯年収別

図表 1-5 でスポーツ活動を「行っていない」比率をみると、世帯年収の低い家庭のほうが高かった。複数の先行研究で指摘されてきた点であるが、改めて子供のスポーツ活動における家庭環境の影響の大きさは看過できない課題として指摘できる。

また、図表 1-23 でスポーツ活動をしていない理由をみると、「費用の負担が大きいから」「送迎や付き添いの負担が大きいから」で特に世帯年収による大きい差がみられた。また、「係や当番」「保護者どうしの人間関係」でも差がみられていた。図表は割愛しているが、「送迎や付き添いの負担が大きいから」「係や当番の負担が大きいから」に関しては、配偶者の有無別の分析でも差がみられている。

ここから指摘したいのは、「保護者が関与を負担に感じる」というのは、保護者のわがままや感情の問題としてのみで解決できることではなく、家庭の経済状況や保護者の生活状況に左右される問題であり、社会課題として捉えられるということである。負担感の強い親のもとでも小学生が希望するスポーツができるためには、費用の負担だけでなく、当たり前のように思われてきた保護者によるスポーツ活動の支援体制についても検討する必要があるだろう。

2章 母親に対するグループインタビュー

1. 調査概要

1. 1 調査目的

第1章で紹介したインターネット調査の結果からは、

- ・子供がスポーツ活動をしている場合、母親はやりがいを感じている人が多い
- ・子供がスポーツ活動をしていない場合、参加しない理由として母親の負担が上位にあがる

ということが明らかになっている。つまり保護者による支援は、一方で子供のスポーツ環境を活性化し、保護者自身のやりがいにもつながるものの、他方で保護者が子供のスポーツ活動参加をためらう要因になる可能性もある。

本章では当事者である母親に対するグループインタビューでの発言を紹介しながら、以下の問いを明らかにしていきたい。

- ① スポーツ活動をしている場合、母親はどのようにして負担感以上のやりがいを持つようになるのか。また、母親たちがやりがいを見いだせる背景には、どのような環境があったのか。
- ② スポーツ活動をしていない場合、母親はどのような負担感を抱えているのか。また、どのような条件があれば、子供のスポーツ活動参加を検討できるのだろうか。

1. 2 調査方法・対象

インタビューの対象者は、首都圏在住で、第1子が小学生の母親とした。対象者の選定にあたり、調査会社の登録モニターに対してアンケートを実施し、子供のスポーツ活動や保護者の属性、インタビューへの参加の可否等を尋ねた。母親および配偶者がスポーツクラブ・教室を運営している場合や、指導者(ボランティアは除く)である場合は対象から除外し、母親は有職・専業主婦がバランスよく含まれるよう配慮して候補者を選び、電話でインタビュー参加の意思確認を行った。結果的に、10人中9人が条件通り、1人は末子が小学生の母親であった。

インタビューは2グループにわけて実施した。第1グループは、第1子が地域クラブで活動し、母親自身も関与の度合いが高いことを条件とした。関与の度合いは、インターネット調査の質問項目を用いて事前にアンケートを実施し、回答を確認して判断した。第2グループは、インタビュー時点で第1子がスポーツ活動を実施していないことを条件とした。各グループのメンバーは、図表2-1にまとめている。

1. 3 調査時期

2017年6月

図表 2-1 インタビュー対象者

第 1 グループ(子供が地域クラブで活動し、母親の関与の度合いも高い)

略称	第1子学年・性別	きょうだい	スポーツ以外の 習い事	本人の職業
Aさん	1年生・男子	いない	学習塾	専業主婦
Bさん	2年生・男子	弟(年少)	学習塾 そろばん	パート
Cさん	4年生・女子	妹(年長)	なし	専業主婦
Dさん	6年生・男子	いない	書道	専業主婦
Eさん	6年生・女子	弟(小2)	そろばん 英会話	パート

第 2 グループ(子供がスポーツ活動をしていない)

略称	第1子学年・性別	きょうだい	スポーツ以外の 習い事	本人の職業
Vさん	1年生・女子	いない	そろばん	パート
Wさん	3年生・男子	弟(年長)	学習塾	専業主婦
Xさん	4年生・女子	妹(小1)	学習塾 ピアノ	専業主婦
Yさん	5年生・男子	兄(大1) 姉(高1)	学習塾	パート
Zさん	6年生・男子	いない	書道	パート

1. 4 調査内容

第 1 グループ: 現在行っているスポーツ活動と、始めた経緯／検討時点での親の関与イメージ／子供の活動状況と親の関与実態／親のやりがい・負担感 など

第 2 グループ: 現在の習い事の状況／スポーツ活動に対する意向／現在スポーツ活動をしていない理由／子供のスポーツ活動を始める上で必要な条件 など

1. 5 本章を読む上での注意点

インタビュー時の発言は基本的にそのまま記載している。筆者による補足は「()」で、テキストの省略は「…」で表記している。

2. 調査結果

I. スポーツ活動をしているグループのインタビュー

— 母親はどのようにして負担感以上のやりがいを持つようになるのか —

1. 母親の支援実態——多岐にわたる役割

最初に、インタビューの参加者は実際にクラブでどのような役割を担っているのかを整理する。図表 2-2 は、母親たちが語ったこの 1 年間の当番・役員・その他の関わりについてまとめた内容である。

図表 2-2 保護者の役割

	種目	当番	役員	その他
Aさん	ミニバスケット ボール	<ul style="list-style-type: none"> 練習場所の予約 鍵をあける、セキュリティ管理 練習の補助(ボールを出す、終わりの挨拶など) 自分の子供以外の送迎(父親) 怪我の手当 コーチへの謝礼等の準備 	やっていない	親子大会への参加 (母親・父親)
Bさん	サッカー	<ul style="list-style-type: none"> 怪我や体調不良の手当 グラウンドの清掃、施錠と鍵の返却 練習試合のセッティング 試合会場の予約 	やっていない	練習試合の審判(父親)
Cさん	サッカー	<ul style="list-style-type: none"> 子供の荷物のセッティング 怪我や体調不良の手当 夏場の熱中症対策(氷や冷たいタオルの準備) コーチの飲み物の準備 試合会場への荷物の運搬(父親) 急な体調不良に備えた車出し(父親) 	会計 ・役員会への参加 ・集金 ・チームのTシャツの発注	練習の補助(父親)
Dさん	野球	<ul style="list-style-type: none"> 練習時の飲み物の準備 イベント時の調理 	会計 ・集金 ・イベントの参加人数確認 など	特になし
Eさん	野球	<ul style="list-style-type: none"> 大会での審判へのお茶出し 大会時の点数記録 自分の子供以外の送迎(父親) 	合宿係(昨年度) ・合宿時のゲームの用意など 納会係(今年度)	コーチとして指導(父親)

図表 2-2 で、「(父親)」の記載がない項目はすべて、母親の役割である。練習や試合の支援、会計など、多岐にわたる役割を務めていることがわかる。また、お祭りなどのイベントや合宿があるチームでは、それらの運営にも母親が携わっている。

インタビューではこれらの役割について、複数の母親が「仕事だと思って割り切っている」旨の発言をしていた。藤田(1995)は野球少年団でのフィールドワークをもとに、母親たちの役割は「野球そのものに直接関わることはなく、裏方、周辺的な仕事」であると指摘しているが、現在もその様相に変わりはない。子供のスポーツ環境は、そのような母親たちの力で支えられていることがわかる。

2. 参加前のイメージ——抵抗感の強い母親たち

現在は多岐にわたる役割を務める母親たちだが、参加前にはどのように考えていたのだろうか。なかには「親子に友達ができる地域クラブがよかった」「地域のお母さんに関わる(こと)、(母親自身が)バスケット

学べるのは楽しみにしていた」(以上、Aさん)と具体的なメリットを期待していた声も聞かれたが、程度の差こそあれ、どの母親も参加前には不安や抵抗感があった旨を語っている。

「仕方がないと思った。(母親の当番があることに)不安はあったけど、『子供がやりたいなら』というのが強い。」(Aさん)

「すごい抵抗があった。想像をふくらめすぎた。1か月半ぐらい自分が(参加するか否かを)考えた。」(Bさん)

「未知の世界だった。(当番などを)なるべくやらないで済むなら、やらない方向で、と思った。」(Cさん)

「正直、(子供が)野球(をやりたい)と言ったときはリサーチした。『どれだけ自分が関わらずに(済むか)』みたいな感じで。私は全然楽しみではなかった。子供のために仕方がないと思った。」(Dさん)

「(母親も屋外で長時間付き添わなければならないので)冬はつらいなと思った。母親(どうし)もギスギスしているのではないかと、ドキドキしていた。」(Eさん)

特にBさん・Dさんの事前の抵抗感は非常に強かった。母親たちがそれぞれ情報収集や思い悩む期間を経て、ようやく参加に至っていることがわかる。

3. 参加後のやりがい——家族や他の子供たちの変化

参加前には不安や抵抗感が強かった母親たちだが、今は何に「やりがい」を感じているのだろうか。インターネット調査の結果(図表 1-19)をみると、「子供が成長したと感ずることができた」が非常に高く、わが子の成長や活躍が励みになることは想像に難くない。しかしインタビューでは、それ以外の点への言及が多くみられた。以下、3点にまとめて記述する。

3-1. 母親どうしの人間関係

インターネット調査の結果(図表 1-19)から、「保護者どうしで仲良く」なれることは、母親自身のメリットになると考えられる。実際にインタビューでも、保護者どうしの人間関係が良好であることが、母親自身のやりがいにつながっている様子がうかがえた。

「学校の知らないことも(チームの)お母さんたちに聞ける。」(Aさん)

「(事前は)本当に抵抗があって、どうなんだろうと思ったけど、(まわりの母親が)意外にざっくばらんに、なんでもお話してくださる。他の学校の方もいるので、いろんな情報が聞けてよかったと思う。」(Bさん)

「同じ学年の保護者の人がみんなすごい仲(が)いい。なのですごく楽しいのでよかったと思う。」(Cさん)

しかし、同時に複数の母親から、「子供の学年はよかったが、他の学年では母親どうしのトラブルがあった」旨の発言が見受けられた。藤田(1995)は、野球少年団で母親たちが「周辺的な役回りを共同で行い、その中で特に子供に関する情報を交換することで連帯感を形成する」様子を描いているが、そもそも保護者たちが「連帯感を形成」できる関係性であることが、母親の「やりがい」にもつながる重要な条件であることがうかがえる。

3-2. 家族の変化

インタビューでは、子供のきょうだいや父親への影響も語られていた。

「(クラブの親子大会をきっかけに)『スポーツをもう 1 回やってみようかな』というので、子供の影響で私たち(夫婦)も体を動かすようになったし、無駄に土日を過ごさなくなった。」(A さん)

「(幼児の)妹を練習にいつも連れていくので、(コーチやクラブの子供たちから)遊んでもらったりとか、自分の家族みたいにしてもらえるのもよかった。夫はパパさんどうしてフットサルチームを作ってやっている。それが楽しそうにやっているの、よかったと思う。」(C さん)

「(夫も含めた)コーチ陣で、ゴルフに行ったり飲みに行ったりとか、そういう楽しみがある。子供もついていったりとか、家族みんなで楽しめている。」(E さん)

親が子供を支えるという一方的な関与ではなく、家族全体でスポーツやその他の活動を楽しめる状況になると、母親も負担感以上のやりがいを感じるができる。スポーツ活動の中心にいる子供だけではなく、同じ時間・空間を共有する家族の満足度の高さは、保護者による支援体制を考える上で1つの鍵となるようである。

3-3. 他の子供の成長

母親たちからは、自身の子供に限らず、チームの子供たちの成長を見るのが楽しいという声もあがっていた。

「今は見学も楽しい。うちの子だけじゃなく、他の子も『あの子成長したよね』とか見るのが楽しい。」(A さん)

「応援は、やる前は憂鬱だった。『試合ついていくの?』という感じだった。行ってみると…とても楽しい。違う子でも、名指しで『今、今(シュート)!』と言うのが楽しい。」(B さん)

「子供たちの成長が一番わかるのが試合を見ること。…10 対 0 とかぼろ負けしているところから見ているので、成長を感じるの、試合を見に行くのが楽しい。すごい強いとか活躍しているとかじゃなくても、成長している過程をずっと見続けられるのが楽しい。」(C さん)

「(大会や試合に)自分の子が出れなくても他の子が頑張ったりするのがかわいくて、嬉しそうな顔をするのもかわいくて、みんなで応援するのがすごく楽しくて、やりがいがある。」(E さん)

以上のように、自身の子供の成長だけでなく、母親や家族の楽しみ、さらにまわりの子の成長も楽しめることが、母親のやりがいにつながっている。

ただ、このような声があがるなかで、D さんは「正直、やりがい、楽しいというのはない」と語り、最後まで積極的な「やりがい」はあがらなかった。D さんは既述のとおり参加前から抵抗感が強く、参加後も「やりがい」を感じることはさほどないようだ。

「楽しいと思うことはない。そこまで(まわりの)お母さんたちとも関わりを持ってないので。野球を見に行っても、チームの人と違うところで見ていることが多い。」

「面倒くさいと言うと、すべてにおいて面倒くさい。なぜやっているかという、仕事としてやっているから。現状やっていて、自分に不利益になることが今現在ない(のでやっている)、というのが一番。去年みたい(に母親どうしの人間関係でトラブルがあった場合)なら、投げ出したくなる。」(以上 D さん)

その他の母親からも、「覚えることが多くて、私は今(気分が)落ちている。」(A さん)、「楽しいときは楽しいけど…心(が)折れそうになるときがある。」(B さん)といった声はあがっていた。2 人ともそれを上回る楽しさを見いだしているものの、熱心にみえる母親たちにも多様なケースが存在し、それぞれに葛藤しながら多くの役割を務めていることがわかる。

4. 母親たちを支える環境

ここでは、そのような母親たちを支える環境に目を向けたい。母親自身も楽しんで活動できる状況には、本人の努力だけでなく、周囲の支えや環境も影響している。翻って考えると、ここで記述するような環境・条件がない場合には、母親たちが強い負担感を抱いてしまう可能性もあるのではないだろうか。

4-1. 父親の役割

第 1 グループの 5 人に共通するのは、父親も固有の役割を担っている点である。具体的な内容は図表 2-2 に記載した通りだが、チームの指導や車の運転など、母親が苦手と感じている部分を担っていることがわかる。図表 2-2 には具体的な記載のない D さんの家庭でも、自身の子供の自主練習への付き添いや、試合時の付き添いは父親が行っているという。

父親が協力できる状況にない家庭は、これらを母親が背負い込むことになる。母親に担う余裕がなければ、子供のスポーツ活動への参加はますます困難になってしまう。

4-2. チームを選べる環境

D さんと E さんは、それぞれ野球を始めるにあたり、複数のチームを検討して選択できる環境にあった。

「近所に野球をやっている子がたくさんいる。強いチーム、弱いチームで真っ二つにわかれている。強いチームのほうは、やっぱり親もすごい関わっていて、…『正直、一緒にやろうよ、とは誘えないな』とやっている人に言われた。」

「うちのチームは『家族も大事にしろ』というチームなので、『(家族で)出かけるなら野球優先でなくていい』というチームなので、無理なくできると思う。」(以上 D さん)

「うちの学校はチームがないけど、…隣の学校に甥っ子がいたので、聞いてみたら土日両方ともで、試合があつて、休むことができないということだった。…『午前だけ(参加するの)はだめなの?』と聞いたら、『雰囲気的にそういうのはないよ』と言われた。もう1つ、自分の実家の近くで、自分が(子供の頃に)行っていた学校にも(チームが)あったので、そこに見学に行ったら、…『午前だけでも午後だけでもかまわない』ということだった。うちは試合させたいというより、体を動かすことが目的だったので、そっちに行くことにした。」(E さん)

D さん・E さんともに、首都圏のなかでも多数のクラブチームが存在する地域に居住する。それぞれ、最

初に検討したチームには保護者の負担や参加時間というハードルがあったものの、別のチームを検討することで、参加に踏み切っている。反対に、こうした親子のニーズにあった選択肢がないことで、スポーツ活動を諦めている家庭が存在する可能性も大いに考えられる。

4-3. 母親たちの支えあい

母親たちは、課された「仕事」をそのまま処理するだけの、受け身の存在ではない。母親どうしの柔軟な対応や工夫によって、負担を軽減している。

「当番は1か月に1回、8時半から16時半まで(グラウンドに)いなきゃいけない。…息子(下の子)が幼稚園だし、(どうしようかと思っていたら)『午前中だけでもいい』と言うから、『おいで』と言うので、『(当番が)午前中だけならな』と思って(クラブに)入れてみた。」

「合宿が去年まであって、去年私は合宿係で、けっこう大変だった。今回総会でみんなで話しあって、合宿が本当に必要なのかという話になって、…『泊まらなくてもいいのではないか』という話になって、今年から(合宿は)なしにしようということになった。」(以上 E さん)

以上、第1グループの母親たちを支える環境について整理した。父親の協力が得られなかったり、家族のニーズにあったクラブの選択ができなかったりすると、母親にかかる負担は大きくなる可能性がある。ただし、クラブにおける当事者どうしの柔軟な対応や工夫によって、負担の大きい役割を軽減することもできる。クラブや保護者間に、保護者の個々の提案や多様性を受け入れる土壌があれば、家庭の状況によるスポーツ活動参加の格差を縮小できる可能性がある。

II. スポーツ活動をしていないグループのインタビュー —母親はどのような負担感を抱えているのか—

1. スポーツ活動に参加しない理由——母親の負担感

続いては、スポーツ活動をしていないグループのインタビューを整理する。母親自身の負担感は、子供のスポーツ活動参加を阻む要因になるのだろうか。インターネット調査の結果を確認すると、スポーツ活動に参加しない理由のなかで保護者の負担に関する項目は比較的上位にあがり(図 1-21)、また子供のスポーツ活動参加を想定した際の保護者の負担感は非常に大きいことがわかる(図 1-24)。

こうした結果からも予想された通り、インタビューは母親の関与・役割に対する抵抗感が強くにじみ出るものとなった。本節では子供の意向・得手不得手とは別に、親自身の意識に焦点をあてて、母親たちの語る「スポーツ活動に参加しない理由」を整理したい。

1-1. 当番や役員に対する抵抗感

母親たちからは、自身の負担感が直接参加できない理由になっているという声が聞かれた。特に、当番や役員に対する抵抗感が強い。母親の役割に対する疑問や人間関係へのわずらわしさが負担の強いイメージとなり、子供の意向や得手不得手とは関係のないところで参加がしづらくなってしまふ。

「ママ友の話を知っていると、(地域クラブは)保護者がみんな来ていて、お茶を出していて、土日つぶれる感じ。…お茶も各自で、自分の子供の分は自分が持っていか、自分の子だけ送迎するとか。練習のときの(親どうしの)わずらわしい付き合いがなく、(親が)不参加ならもっと前向きに検討する。」(Vさん)

「安いところ(クラブ)に行っても、その後の(母親どうしの)お茶とかで、お金がかかたりする。」(Wさん)

「スポーツさせに行っているのに、(スポーツとは)全然違う部分で(なぜ親が関わらなくてはいけないのか)、と
思ってしまう。全くスポーツとは関係ないわずらわしさをわざわざそこに入れてやらなきゃいけないというのは。毎
回集まって役員(を)決めたり、お茶当番とか。…それをやることに必要性を感じない。」(Xさん)

「(地元のクラブは)毎年役員決めがあって、そういうのも面倒くさい。やるやらないも面倒だし、そこで人間関係
で、『あの人はやってない』とかなる。子供がらみでそんなのは、親が疲れてしまう。」(Yさん)

具体的に、そのような「わずらわしさ」がなければ参加を検討できるという声も聞かれた。

「練習のときの(親どうしの)わずらわしい付き合いがなく、(親が)不参加ならもっと前向きに検討する。」(Vさん)

「むしろ『保護者(は)来るな』とはじめからうたってくれるとよい。普段の練習で毎回保護者が来なきゃいけない
とかは、子供のスポーツ云々より、自分の負担を考えてしまって、『やめた』となる。」(Zさん)

なかには、母親たちの間で「費用をとるか、当番をとるか」という考え方があることをうかがわせる発言も
あった。

「わずらわしいのがあると嫌なので、1000円、2000円のプラスアルファで、今わずらわしいと思うものが全部なけ
ればよい。」(Wさん)

「うちのほう(=地元)では(同じ競技でも)2つ(のクラブから)選ぶ感じ。『うちはお金がないから、…学校に入れ
るけど、その代わり覚悟して入る』という人と、『お金は大事だけど、(それでも当番などは)絶対に嫌だ』という
人がいる。」(Xさん)

このように、母親の負担感がスポーツ活動を前向きに検討できない理由となり、また母親の関与やそれ
に伴う「わずらわしさ」の軽減が、スポーツ活動に対するニーズにもなっている。

1-2. 親子のタイミング

母親の関与に対する負担感は、それ自体がスポーツ活動不参加の理由にもなり得るが、インタビュー
からは、それだけではない事情も垣間見えた。

実は第2グループの母親たちは、5人も今でも子供に「できるなら何かスポーツ活動をしてほしい」と思
っている。なかには子供の意欲もあり、具体的にスポーツ活動への参加を検討した家庭もある。だが、親
が支援可能なタイミングと、子供の意欲があがったタイミングがかみ合わずに、参加を諦めている。

「(スイミングに関心があった)保育園のころ、自分の仕事がフルタイムだった。それで送迎ができなかった。今
(自分は)少し余裕ができたけど、(子供)本人が逆に行きたくないと言う。」(Vさん)

「(入ろうと思っていたクラブが、)上層部が変わって、活動場所を毎週ママたちが予約してとることになった。それを聞いて大変だよねと思ってから、それじゃ嫌だなと思った。…すごい気に入っていたけど。…うちの子はそれ(活動風景)を見て『やりたい』となった。とっかかりとしていいと思ったけど、その状態だったので、どうしようと思った。(子供は)やる気になっていていいけど、…(会場を予約)できないときに(当番の母親は)大変らしい。」(Wさん)

「サッカーを一時期調べたりしたけど、女の子はうちのまわりでやっていなかった。それで『どうする?』となっているうちに、フェードアウトした。タイミングがある。子供が行きたいと盛り上がったときに、見つけられなかった。もうちょっと頑張れば、遠くのスポーツクラブに行けば女の子のサッカークラブもあると思うけど、『それを越えてまで』という情熱とかもあるし…。」(Xさん)

Wさんは親子のニーズにあったクラブの経営事情の変化、Xさんは競技特有の事情や環境の問題と、事情は多様である。また、Vさんのような問題は共働きやひとり親家庭など、今後も多くの家庭で起こり得ることであろう。

いずれも子供の意欲が高まったタイミングで、保護者も支援が可能な状況を作り出せなかったために、参加をあきらめたケースと捉えられる。

2. 具体的な要望—参加を検討するために

それでは、どのような条件があれば、母親たちは子供のスポーツ活動参加を検討することができるのだろうか。インタビューでは、既にあがっている保護者自身の負担軽減以外にも、具体的な要望を聞くことができた。2点にわけて紹介したい。

2-1. 複数回の体験機会

インタビューでは、親子が決断しやすいよう、複数回の体験参加を可能にしてほしいという声が聞かれた。

「月会費、入会金で組まれて(クラブに)入れてしまって、(子供が)『やっぱり嫌だ』となると、親は全部そろえてやる気満々だけど、子供だけがついてこないとなると困るので、5回ぐらいはお試しで行けたらよい。」(Wさん)

「(体験会を)1回ではわからないから、3回・5回とか、ある程度回数こなしてもらって、それでも本当にやるかどうか(を決めたい)。子供はノリがいいけど、私はその場で決断はできない。」(Zさん)

参加にあたっては、子供が嫌がる場合も、親が悩む場合もある。1-2.で既述したとおり、子供の意欲と親の条件がそろわないと、スポーツ活動を始めるのは難しい。特に親子のいずれがスポーツ活動に積極的ではない場合には、その両方の観点を見極めるために体験の機会が複数回あることが望ましいと思われる。

2-2. 地元クラブに関する情報提供

体験の機会だけでなく、そもそも地域にどのようなクラブがあるのかわからないという声も聞かれた。

「スポーツの情報が少ない。たまに小学校から『バスケやりませんか』というのはあるけど、もっとたくさん情報がほしい。」(Yさん)

「今越してきて2年だけど、自分のママ友がいないから、情報が入っていない。…学校でやっているのもわからない。小さいお教室だと、検索しても出てこない。市でやっているのもわからない。民間も大手はわかるけど、小さいところはわからない。」(Zさん)

地域クラブには充実したHPを持たない団体も多く、Web上で収集できる情報は限られる。そのため、特にZさんのように子供の転校を経験している場合には、母親が有益な情報を得ることが難しくなっている。

以上2点が、第2グループからあげられた具体的な要望であった。現状では、親子に適切な情報や体験の機会が行き届いていないことが、スポーツ活動参加の機会を狭めている可能性が指摘できる。2つの要望はいずれも実現が不可能なものではない。親子だけでなく、クラブにとって、また地域のスポーツ活動の振興にとっても重要なのではないだろうか。

3. 結果のまとめ

母親に対するグループインタビューからは、以下の点が明らかになった。

- ① 現在熱心に関与している母親は、自分の子供の成長だけでなく、母親自身や家族の楽しみ、さらにまわりの子の成長も楽しめることが、やりがいにつながっていた。
- ② やりがいを感じられる母親たちの背景には、父親との役割分担、母親どうしが支えあう関係性などがあった。
- ③ 子供がスポーツ活動をしていない場合、母親は当番や役員に対する抵抗感が特に強く、その「わずらわしさ」を回避するため、参加を前向きに検討できずにいた。
- ④ そのような母親のあいだでは、クラブの情報や複数の体験機会に対するニーズがあった。

第1グループのインタビューの最後に、「自身の関与を負担に感じている母親たちをどう思うか」と投げかけたところ、5人から積極的に参加を勧める発言は出なかった。たとえば、参加前の抵抗感が非常に強かったBさんは、慎重に言葉を選びながら「お母さんがつらいと子供に影響するから、『お母さんが子供のために、と思うぐらいなら絶対やめたほうがいいよ』と言う」と語っている。

インタビューからは、母親も葛藤しながら努力をしている上に、家族やチーム、チームを取り巻く環境に支えられて、子供たちがスポーツに参加できる条件がそろっている様相が見て取れた。西島ほか(2012)は、「機会にアクセスする意欲や条件が個人によって異なる可能性」を指摘しているが、家庭のあり方も多様化するなかで、子供の意欲があるタイミングで親が参加に踏み切れる環境を整えることが、これからの課題となるだろう。

今回のグループインタビューは、首都圏在住の母親を対象にしている。そのため、親子の通える範囲に複数のクラブを検討できる環境があり、スポーツ以外の習い事の選択肢も充実しているケースが多かった。また、インタビューは平日の昼間に実施したため、参加者にはフルタイムで働く女性が含まれなかった。

このような対象者の特徴は本調査の限界でもある。そのため得られる知見は必ずしも一般化できるものではないが、当事者の貴重な声として提示しておきたい。

3章 地域クラブ事例調査

1. 調査概要

1. 1 調査目的

2章のグループインタビューでは、母親たちが家族やチーム、チームを取り巻く環境に支えられている様子が浮かび上がった。3章では実際のクラブでのインタビューを通して、母親とチーム(指導者や運営スタッフ)の関係性や、母親を支える環境について、具体的な事例をもとに明らかにしていきたい。

1. 2 調査方法・対象

2つのクラブにおいて、母親に対するグループインタビューを実施した。インタビュー対象者は、各クラブの事情にあわせて指導者から依頼をもらった。インタビューは各クラブの活動場所付近の会場で行った。あわせて活動風景の見学、指導者へのヒアリングも行っている。

1. 3 調査時期

2017年9月

1. 4 調査内容

現在行っているスポーツ活動・始めた経緯／検討時点での親の関与イメージ／子供の活動状況と親の関与実態／親のやりがい・負担感 など

その他、各クラブの事情にあわせて、特徴的な取り組みについては深く掘り下げて聞くようにしている。

1. 5 本章を読む上での注意点

インタビュー時の発言は基本的にそのまま記載している。筆者による補足は「()」で、テキストの省略は「…」で表記している。

2. 調査結果

FCゴール

1. クラブ概要

① 所在地	神奈川県横浜市
② スタッフ数	6人(うち専任2人)
③ 会員数(小学生)	約50人
④ 活動内容	主たる活動は子供のサッカー。幼児と小中学生(U8,U10,U12,U15)のクラスがある(小学生の活動の詳細は以下⑤～⑨を参照)。その他「からだづくり運動教室」として各種教室を開催。また、学習補助の一環として「チャレン塾」を開催
⑤ 活動日、時間	毎週月曜・木曜・金曜・土曜・日曜。1回あたりの活動時間は1時間半
⑥ 活動場所	地元の小学校・中学校
⑦ 試合等	主には春、夏、秋、年明けに、各種試合に参加
⑧ 合宿	年に2～3回。長期休暇中に実施
⑨ その他の活動	新年には「初蹴り」を実施。OBや保護者も多数参加するイベント

注)⑤～⑨は小学生のサッカー(U8～U12)に関する。

2. 活動風景

最寄りの駅から徒歩5分ほどの距離にあるビル内に、FCゴールのクラブハウスがある。活動場所からも近く、普段から会員の子供たちの居場所となったり、練習中に保護者が談笑したりしている。未就学児が遊ぶことのできるおもちゃもあり、会員の弟妹を連れて移動する保護者も過ごしやすい場となっている。

活動場所として、近隣の学校の施設(グラウンド・体育館)を使用している。見学した日は平日の夕方、夜間照明で煌々と照らされたグラウンドで、26人の子供たちが活発にサッカーの練習をしていた。学年別(U8,U10,U12)に3グループに分かれ、各グループ1人のコーチが指導している。練習は90分を3ブロックにわけて行う。最初はコーディネーショントレーニング、次に各コーチが課題だと思ふスキルの向上を目的とした練習、最後にゲーム形式の練習を実施する。



写真1 サッカー(U10、U12)の活動風景

練習終了後は、身につけていたビブスを指導者に返却し、低学年の子供たちが竹ぼうきでグラウンドの周囲をはき、上の学年の子供たちがトンボでグラウンドを整備する。終了すると、子供たちは迎えに来た保護者とともに帰宅する。練習中、最初から最後まで付き添う保護者は少数である。

FC ゴールは総合型地域スポーツクラブとして、サッカー以外にもさまざまな活動を展開している。見学した日には、サッカーと同時間帯に、体育館で「少年少女バレー」が行われていた。コートを2面設け、1面では高校生が男女合わせて15人程度、もう1面では成人女性が6人程度、それぞれバレーボールのゲームを行っていた。もともとは、保護者の間から「子供たちが活動している間に、自分たちも何かスポーツをしたい」という声があがり、始まったという。そのうち、バレーボール部がない高校に進学したクラブのOB・OG やその知人も加わり、現在のような形で活動するようになった。コート上ではにぎやかな声が飛び交い、自分たちのペースで楽しくバレーボールを続けている様子であった。



写真2 練習後のグラウンド整備を行う子供たち



写真3 「少年少女バレー」の活動風景

3. 保護者インタビュー

3-1. 概要

対象となったのは第1子が小学生の母親計4人で、2017年9月中旬に一度面会し、下旬に正式なインタビューを実施した。クラブでの保護者の関係性や指導者の関わり方について、時に具体的な親子のエピソードを交えながらお話しいただいた。子供2人も同席して、終始にぎやかな雰囲気で行われた。

FC ゴールの会員は、近隣の複数の小学校の児童から構成されている。また、繁華街がすぐ近くにあり、夕方から夜間に働く母親も少なくない。最近では外国籍の住民も急増し、子供が入会するケースも増えている。多様な家庭環境・生活スタイルを背景にしたクラブである。

そうしたなか、インタビュー対象の母親たちには、指導者も含めて冗談を言いあえるような関係性がみられた。

3-2. 保護者の役割

クラブが保護者に求めている役割は、自分の子供の「夜間練習時の送迎」「試合時の送迎」のみである。保護者の係や当番はない。指導者によると「当番にしないで、できないことは互いに助けあう」方針だという。そして保護者に役割を求めない分、指導者たちが練習時に使用するビブスの洗濯やイベント時の調理なども担当している。母親たちは入会時を振り返り、指導者から「練習から何からもう、こちらで全部見ますので、親御さんから口出しするようなことはやめてください。子供が混乱しちゃうから」と言われた旨を語っている。

ただし、実際には家庭の都合で子供の送迎ができない場合もある。そのような場合に関しては「子供は行けるのに(という状況)だったら、(保護者どうしで)声かけあって連れていってあげる」という。また、そのようにして他の子供も連れていく保護者に対しては、指導者が「ちゃんと、『お願いします』みたいな」声かけをしている。

また、指導者が引率をする試合もあり、練習試合の場所によっては、「コーチが『(保護者が)行けなかったら声かけてください』って言うってくれる」ときもあるという。地元の祭りにも指導者と子供たちだけで参加し、保護者の手伝いは必要ない。

親どうしでは、「特別に何か集まって(すること)はない」学年も多いと言う。しかし、「お母さんたちも仲がいい」関係性で、6年生の卒業時には有志で下の学年からプレゼントをする慣習がある。

3-3. クラブの特徴

ここまで保護者の役割が少ない地域クラブは、珍しい事例かもしれない。ただ保護者の負担が少ないだけではなく、クラブに対して信頼を寄せ、自然と保護者どうしが盛り上がる空気ができるには、クラブの指導方針等の特徴も影響している。

(1) 活動方針・指導方針

母親たちのインタビューでは、「いい意味のゆるさ」という言葉が聞かれた。「ゆるい」という単語そのものは決してプラスイメージにはならないが、どのような点が「いい意味」なのだろうか。インタビューからは、いくつか「いい意味のゆるさ」を形成する要素が見つかる。

第1に、クラブの活動内容・形態である。活動日は、平日3日と土曜・日曜をあわせて週5日である。しかし会員はすべての曜日に参加する必要はない。「学校のクラブ活動が遅くなった日は休む」といった調整も可能である。子供たちは参加できる曜日だけ来ればよく、インタビューした4家庭でも、週2~5回までさまざまであった。

一方で、「試合の経験を積む」という方針で、試合・練習試合の回数は確保している。特徴的なのは、レギュラーと補欠の区別がない点である。途中交代も含め、全員が出場できるようにしている。指導者によると、試合のメンバーは子供たちに決めさせていて、じゃんけんで決まることもあるという。母親によると、「まれに『勝てる!』ってときは、そのまま」のメンバーで続行する試合もあるようだが、語り口からはその「まれ」な状況も親子で楽しんでいる様子が見えがえた。

第2に、指導方針である。指導者の様子については母親たちから口々に語られたが、いくつか特徴的な点を記述したい。まず、感情に任せて怒鳴ったりすることがないという。母親たちは「コーチの気分で子供たちと接してるというのは、今まで見たことない」「(試合中に子供たちが)何しても穏やかでいられるコーチがすごい」と語る。また、運動能力やスキルの高さなどで子供たちを序列化するのではなく、「子供たちの発育発達を第一に考え」「社会性を学ぶ」(以上、クラブのチラシより引用)ことを意識した指導が行われており、母親もその点に大きな信頼を置いている。インタビューでは、「一人ひとり、どういう性格の子なのかっていうのをよく見ている」「(試合に)『ただただ、うまいから出す』わけじゃなくて、日常生活を送っているなかで、何かいけないことをすればペナルティ(=試合に出られない可能性)がある」「ダメなことはダメだし、いいことしたら褒めてくれる」「合宿で(周囲に迷惑をかけない)シャワーの浴び方とか(教えてくれた)」等の発言が聞かれた。

母親たちは入会時を振り返り、自身の子供について「人の輪に入れなかった」「人見知りがすごくて、親離れできない状況が続いて」など、競技力よりは発達・社会性の部分で子供の課題を感じていた旨を語っている。クラブの活動内容や指導方針は、そうしたニーズに応えることができている。また親子に強制がなく、ゆるやかにつながっていることが、かえって互いの信頼や仲のよさを支えている。母親が口にする「いい意味のゆるさ」とは、競技力だけに特化しないクラブの指導方針や、困ったときに助けあえる会員間のゆるやかなつながりの上に成り立っていることがわかる。

(2) 後進の育成

クラブの指導者は、50代のコーチ兼クラブマネージャーと、20代のコーチ5名である。20代の指導者たちは、皆クラブのOBまたは出身者で、かつては現クラブマネージャーから指導を受けた身でもある。(1)で記述したクラブの指導方針は、「クラブマネージャーだけじゃなくて、若い他のコーチの皆さんも」継承し、クラブ全体を支えるものとなっている。

若い指導者とともに活動場所付近を歩くと、短時間にもかかわらず、クラブのOB・OGを含む多くの子供たちから声をかけられていて、子供たちから親しまれ、信頼を得ている様子がうかがえた。そうした指導者の姿は、現会員の子供たちの憧れにもなっていて、母親からは「(子供が)ここで働きたいって言ってた」というエピソードも聞かれた。後進の育成が未来のためだけではなく、現会員の親子の信頼にもつながっている様子が浮かび上がる。

新町 SVC スポーツ少年団

1. クラブ概要

① 所在地	群馬県高崎市
② スタッフ数	指導者 1 人、ほか中学生～大学生のユースボランティアが活動を補助。
③ 会員数(小学生)	65 人(小学生 37 人)
④ 活動内容	走り方、ドッジボール、スキー等のさまざまなスポーツを実施。低学年はバランス力を身につけるさまざまな種目の体験、高学年は自分たちが考えた種目が中心。
⑤ 活動日、時間	毎週日曜日。1 回あたりの活動時間は 2 時間。
⑥ 活動場所	地元の小学校
⑦ 試合等	特になし
⑧ 合宿	年に 1 回、秋に 1 泊 2 日で実施。
⑨ その他の活動	バーベキュー大会、スキー合宿、体力チャレンジ&クリスマス会、ドイツや沖縄のスポーツ少年団との交流事業等、さまざまな事業を実施。ジュニア・リーダー、シニア・リーダーの養成にも力を入れている。

2. 活動風景

新町SVCスポーツ少年団は、群馬県高崎市新町で活動するスポーツ少年団である。新町は 2006 年に隣接しない高崎市と合併して飛び地になっている地域で、町内には 2 つの小学校と 1 つの中学校がある。子育て世帯は夫婦のいずれかが新町出身のケースが多く、母親によると「他の地域に比べて、お母さんが新町(出身)というのがすごく多い」のだという。

そのような地域で、少年団は約 50 年の歴史を持ち、親子 2 代にわたる団員も徐々に増え始めている。1997 年には、少年団を核とした地域総合型スポーツクラブ「新町スポーツクラブ」が設立され、団員には少年団以外の教室にも通う子がみられる。活動場所は最寄り駅から車で 5 分ほどの小学校である。中学校が隣接し、周囲は住宅街で、徒歩圏内には上武大学のキャンパスが立地する。

見学した日は雨天のため、体育館で活動が行われた。活動時間が近づくと、車や徒歩で次々に親子がやってくる。少年団で作っているおそろいの T シャツを着た子供もみられる。この日は小学 1 年生から 6 年生まで約 15 人の団員が集合すると、指導者から話があったのち、前半の 1 時間はコーディネーショントレーニングをベースにした動きづくりや走力強化のプログラムで汗を流した。

後半の 1 時間は、子供の主体性や協調性を育むため、子供たちがやりたいスポーツや運動遊びを話しあい決めて行う時間にあてられた。この日は議論の結果、鬼ごっこや「だるまさんが転んだ」などを全員で行った。このように、少年団の「スポーツ嫌いの子供たちを歓迎する」「地域社会で必要とされる青少年を育成する」というコンセプト



写真 4 前半の活動風景

が反映された活動内容で、1つの競技に特化するというよりは、楽しく体を動かす活動やリーダーの育成に重きを置いている。

この日は中高生のリーダーが7人参加し、小学生たちと活動を楽しみながら、指導の補助も行ってた。また、「当番」として2人の父親も参加していた。



写真 5 高校生(シニアリーダー)の体験談を聞く子供たち

3. 保護者インタビュー

3-1. 概要

インタビューは2017年9月下旬に、母親6人に対して実施した。子供の年齢は小学生から社会人まで幅広く、以前から現在までの保護者の関わり方や課題について、多様なエピソードを交えたお話をうかがうことができた。

新町 SVC スポーツ少年団の小学生団員は、ほとんどが活動場所となる新町第一小学校に通う子供たちである。インタビューには他の小学校から通う子供の母親も参加してくれたが、「第一小でやっている活動には(他の小学校からは)行っちゃいけないみたいに思っている人も」いる旨を語っていた。少年団としては「どこに住んでいる人も」歓迎していて、現在は新町以外の地域から通う団員もいるが、基本は1つの小学校区に根付いてきた少年団といえる。

そうした地域で長年、母親を中心とした保護者が役員や係を分担して、少年団の運営を支えてきた。インタビュー対象となった母親には、子供の頃から現在まで新町に住み続けている母親、職場や出身中学が同じ母親どうしもみられた。

3-2. 母親たちの役割

まずは、保護者の役割を整理する。活動場所は学区の小学校、活動時間も週1回2時間であり、日頃の送迎は必須ではない。学区に住む子供たちは、1人で通うこともできる。保護者組織としては、書記・会計からなる「本部役員」のほか、「スキー係」「合宿係」等の各種イベントの係や、「SVC新聞」を作成する「広報研修部」等が存在し、保護者はいずれかの役員・係を担当する。

「本部役員」はかつて6人体制、近年では4人体制で、「交代で来て、鍵を開けて、救急箱の用意をしたり」、「当日使ったビブスを持って帰って洗濯したり」、「月謝の収支を管理したり」と、日頃の活動を支える重要な役割である。しかし現在は団員数の減少に伴い、「本部役員」の担い手減少という課題に直面している。小学生がいる家庭でも、中高生のきょうだいが部活などで忙しくなると、保護者も「なかなかこっち(少年団)へ来られなく」という。

そこで現在は、「苦肉の策」として役員制から当番制への変更を試み、中学生の保護者が通常時の活動を補助している。当番は「1年に何回かまわってくる」ぐらいの頻度だと言う。ある母親は、かつては幼児・小学生の子育てで余裕がなく、「自分が一人になる時間がほしくて」子供を入団させていたと語るものの、現在は子供が大きくなったことで「気持ち的にも余裕ができて、当番(に)行っても大丈夫かなって感じ

に変わりつつある」と支える側にまわっている。子供の人数が減少しても、新町には保護者どうしが「声をかければ、協力してくれる」関係性があるという。

また母親たちは、周囲から少年団は「保護者が大変っていうイメージ」でみられていて、入団の勧誘をしても、保護者が当番を理由に断るケースもあると語る。ただし、実際の団員の母親たちの間ではそれほど負担感はなく、「やってみたらたいしたことはない」「いろいろ情報交換できたりなんかして、楽しく過ごせてよかった」という声が多い。指導者も「できる人ができない人を助ければいい」という考え方で、保護者が活動に参加しづらい家庭も受け入れている。

3-3. クラブの特徴

このように、少年団は役員の担い手の減少という課題に直面しつつ、母親たちの工夫や支えあいで乗り切ろうとしている。それだけでなく、クラブには指導者以外にもさまざまな人が活動に参加したり支えたりする仕組みがみられる。

(1) 活動方針・指導方針

第2章で母親たちが「やりがい」を見いだすポイントとして「家族の変化」を指摘したが、新町 SVC スポーツ少年団には、その「家族の変化」を起こすしかけが多くみられる。

たとえば少年団が年に1回実施する合宿にあたっては、指導者から保護者に「大変なんだけど、小さいお子さん(を)なるべく連れてきてください」と話しているという。合宿ではウォークラリー、ボールを使った運動、キャンプファイヤー、野外炊事などのプログラムがあるものの、幼児の子供たちは自由に遊ばせている。指導者によると、合宿を始めた当初は、「(家族)皆が一緒に行けなきゃつまらない」という理由で参加させていたが、現在は幼児が参加することで「小学1・2年生もちゃんと面倒をみる努力をする」「小さい子がいてくれたほうが合宿の効果が高い」と考えているという。実際に幼児のきょうだいを連れて参加した母親も、「皆が活動している所にいっぱなしでも、誰かしら一緒にやってくれる(遊んでくれる)」と語っている。また、子供が低学年だった時期を振り返って、「大人が遊んであげているよりも、大きい子がみているっていい、いい環境だなんていうのがあった」と語る母親もいた。

合宿以外にも、スキー教室に幼児のきょうだい・母親・父親も一緒に参加するなど、家族ぐるみでイベントを楽しんでいる家庭は多い。子供たちも種々のイベントは楽しみにしており、「全部」参加していると語る母親は多かった。

実は、新町 SVC スポーツ少年団でも FC ゴール同様に、母親たちの中から肯定的な文脈で「ゆるい」という言葉が聞かれた。かつては保護者の間でも「ガツガツ勝ちに行く」志向が強い時期もあったようだが、大半は少年団での活動を「チームワークを作るのが目的」「自分たちで何かを考えていくというプロセスを学べる」などと考えている。

母親たちの語る「ゆるい」は、勝利至上主義ではない活動方針に加えて、異年齢の子供たち、家族、OB・OG など、多様な人々に関わることで作られる場のあたたかな雰囲気への評価を含んでいるものだろう。

(2)後進の育成

スポーツ少年団には「日本スポーツ少年団リーダー制度」に基づいた、リーダースクールを修了すると付与される「リーダー資格」がある(日本体育協会, online)。新町少年団でも、中高生になった団員のなかにはジュニアリーダー・シニアリーダーの資格を取得し、日常の活動や行事に顔を出している子供たちもいる。さらに大学生や社会人のなかには、指導者資格をもつ OB・OG もいる。彼らは指導者からの「LINEひとつで駆けつけてくれる」関係性で、団の活動をフォローしている。クラブに常時携わる指導者は1人だが、こうした数々のボランティアスタッフが少年団を支えている。

そうした先輩たちの姿から、小学生の団員も自然と団への関わり方を学んでいる。たとえば、「クラブ概要」に記載したイベントには、新町少年団単独で開催するもの、クラブ全体に参加対象を拡大したものが含まれているが、いずれも少年団の中高生・大学生が「中心になって動かす」ので、小学生の団員たちも「先輩たち来ているから、皆一緒に出てくるみたいな感覚」でほぼすべてのイベントに参加するという。

中高生は、ドイツの少年団(スポーツユエгент)との交流事業にも参加している。中高生がドイツに滞在することもあれば、中高生の家庭がホストファミリーとなり、ドイツからの訪問を受け入れることもある。事業の終わりには感動してほとんどの青少年が号泣する。保護者も「役割とかじゃなく、自分が好きでやっている感じ」「親が楽しむ感じ」で受け入れをしている。

このように、少年団ではリーダー育成に力を入れていて、小学生の団員にも活動を支えるイメージが自然とできていく。また、日頃の活動には顔を出せない OB・OG も、成人式当日は多数が晴れ着やスーツ姿で参集し、成人になっても交流が続いている。さらには OB・OG の親にも、協力を惜しまない人たちがいる。地域性だけではなく、こうした少年団の取り組みによって「声をかければ、協力してくれる」体制が築かれている。

3. 結果のまとめ

以上、2つのクラブのインタビュー内容をまとめた。

2つのクラブには、母親たちが肯定的な文脈で語る「ゆるさ」がある。それらは共通して、競技力や勝利だけにこだわらない活動方針、子供の発達や社会性を重視した指導方針や、指導者と保護者の信頼関係によって支えられるクラブの雰囲気を含んでいた。

学校部活動の研究では、「競技の論理」に対する「教育の論理」(友添 2016)、「競争の論理」に対する「居場所の論理」(内田 2017)という言葉が使われている。両者に共通するのは、選手育成や試合の成績ではなく、主体性や社会性の育成・涵養が重視される点である。母親たちが語る、いい意味での「ゆるさ」を支える条件は、「教育の論理」「居場所の論理」に近いのではないだろうか。それが保護者のクラブに対する信頼につながり、保護者役割のないクラブではゆるやかなつながりがうまれ、保護者役割のあるクラブでは母親やOBたちが助け合う土壌がうまれている。

民間のクラブが一定数を占め、市場の論理が働く小学生のスポーツ活動においては、当然「競技の論理」「競争の論理」で活動するクラブも多く、それを否定することはできない。しかし、保護者の生活時間や価値観、家庭の経済状況が多様化するなかで、「ゆるさ」に対するニーズは決して低くはない。保護者が評価する「ゆるさ」があり、参加しやすいクラブの存在は、負担感の強い親のもとでも子供が希望するスポーツができるための環境につながるのではないだろうか。母親たちの声からは、そうしたクラブが地域で果たす役割の大きさと可能性を感じることができた。

なお、本調査では、競技力向上を強く志向するクラブは対象に含んでおらず、得られた知見は一般化できるものではない。その点は今後の研究の課題として指摘しておきたい。

まとめと考察

まとめと考察

まずは、3 調査を通して明らかになったことをまとめたい。

- ① 母親がスポーツ活動への関与に対して抱く負担感には、年収などの家庭状況による差がみられる。
- ② 子供がスポーツ活動をしていない場合、母親は当番や役員に対する抵抗感が特に強く、その「わずらわしさ」を回避するため、参加を前向きに検討できずにいる。
- ③ 現在熱心に関与している母親は、自分の子供の成長だけでなく、母親自身や家族の楽しみ、さらにまわりの子の成長も楽しめることが、やりがいにつながっている。
- ④ 熱心にみえる母親にも葛藤があり、家族やチーム、チームを取り巻く環境に支えられて、子供たちがスポーツ活動に参加できる条件がそろっている。

母親がスポーツ活動の支援を負担に感じるということは、家庭の経済状況や保護者の生活状況に左右される問題であり、社会課題として捉えられる。子供にとってのスポーツ活動機会に関わる課題でもあり、長い間母親が担ってきた役割や今後のスポーツ活動の支え手をどのように捉えていくかという問題にもつながる。

最後に、保護者の状況にかかわらず小学生が希望するスポーツができるためには何が必要なのか、当事者や周囲の人々にできることは何かを考察する。

1) 当事者（母親）にできること

1 章のインターネット調査の図表 1-24(p29)にあるように、また、2 章の母親に対するグループインタビューのⅡ-1-1 にもあるように、スポーツ活動をしていない母親の間で、保護者役割に対するマイナスイメージは相当に大きいものであった。家庭内の多くの役割が母親に任せられる実情に加え、スポーツ活動における周辺的な役割が長年母親に課されてきた事実は、当事者たちが一番よく知るところである。しかし、3 章の事例のような、保護者の負担が少ないクラブが存在する地域もある。また、2 章 I-4-3 や 3 章の事例でみたように、保護者の役割は、母親どうしの工夫や指導者との関係性のなかで変化させることもできる。チームへの参加が難しければ、スポーツに親しむきっかけとして、図表 1-26(p31)にあるような地域の公共施設を利用したり、体験イベントに参加したりすることもできる。

とはいえ、母親個人にできることには限界がある。桜井(2017)が指摘する「さまざまな配慮をできる限り完璧にしなければという母役割プレッシャー」をこれ以上強調することなく、子供が希望すればスポーツ活動に参加できる状態をかなえるには、スポーツ活動の環境そのものを見直すことが重要であろう。

2) 地域のスポーツ関係者（行政、体育協会、クラブ）にできること

クラブにおいては、3 章の事例のように「できないことを助け合う」運営方針を立てることで、親子が参加しやすい環境をつくることができる。父親や若手の指導者、OB・OGなどが、従来母親が担ってきた役割を可能な範囲で引き受けたり、係や当番のあり方を現状に合わせて見直したりすることもできるだろう。また、子供の意思や志向、家族のライフスタイルに合わせて、練習や試合への参加が柔軟に決められるクラブがあれば、多様な親子が参加を検討しやすくなる。

さらに、2章のⅡ-2-2からは、スポーツ活動に関する情報を得ることが難しいと感じている母親の存在も明らかになった。余裕のない家庭では、保護者どうしで情報交換する機会も少ない可能性がある。ただし、限られたスタッフ・予算で活動する個々のクラブが皆、充実した Web サイトを作成することは難しいだろう。スポーツ少年団やその他の地域クラブの多くは、公共施設や学校を活動場所として利用している。市区町村の体育協会やスポーツ担当課が、そうした場で活動するクラブの実態を把握・集約して公開することで、より多くの保護者に情報が届くようになるのではないだろうか。

クラブの情報だけではなく、図 1-26 (p31)からは、子供がスポーツ活動をしていない場合は地域の施設やイベントにも縁がない家庭が多いと推察される。すなわち、そうした施設やイベントは、既にスポーツ活動をしている親子にとっては開かれた場所であるものの、そうでない親子にとっては敷居の高い場所になっている可能性がある。競技経験の少ない子供や普段スポーツに関わらない保護者でも気軽に出入りできる場や、体験イベントをきっかけに活動を継続できる場を、さらに充実させていくことが求められるだろう。

3) 研究者、社会にできること

一方で、保護者による言動がスポーツ指導の妨げになっている事実もある。たとえば村山・洪倉(2017)は、保護者の調査を通して「不平不満」「暴力的言動」「現場介入」といった問題行為があることを明らかにしている。こうした行為が現場にもたらす影響は深刻な問題として受け止める必要があるが、村山によると問題行為を起こすのはごく一部の保護者であるという。残念ながらこうした一部の親の言動が、時に強調されやすいのではないだろうか。

2章のグループインタビューでみたように、母親たちはさまざまな葛藤をしながら支援に励み、やりがいと負担感の間で揺れている。さらには、そうした場に行く余裕のない母親たちも多く存在する。長い間、「周辺的な役割」を仕事のように引き受け、子供のスポーツ環境を支えてきたのは母親たちであるという事実は直視されるべきである。母親に当たり前のように課される「周辺的な役割」の内容を見直すこと、母親以外の担い手を増やすことは、スポーツ活動に限らず子供が育つ環境全体の問題でもあり、当事者や現場の指導者・スタッフだけでなく、社会全体で検討できる課題であると考えられる。

參考資料

母親たちが生きてきた時代

インターネット調査の回答者の年齢は20～50代に分布し、平均値・中央値がともに40歳、最頻値が38歳であった。2016年度調査時点で40歳の母親、すなわち1976年生まれで、小学生の子供がいる母親を例として、母親たちが生きてきた時代を振り返りたい。

小学生（1983.4～1989.3）

1976年の出生数は約180万人¹。出生数が既に減少傾向にあったとはいえ、2016年現在が約98万人であることをふまえると、まだ同年齢の子供が多い時代である。

小学校入学は1983年。この年にはファミリーコンピュータ(ファミコン)が発売され、子供たちの間に急速にテレビゲームが広まっていく。またこの頃は、数々のスポーツを題材とした漫画が誕生し、流行した時期でもある。具体的には、キャプテン翼(サッカー、1981～1988年連載)、タッチ(野球、1981～1986年連載)、YAWARA(柔道、1986～1993年連載)などがあげられる。また、テレビではラグビーを題材にしたドラマ「スクール☆ウォーズ」が放映され、高視聴率を獲得した。スポーツ活動の場としては、スポーツ少年団が拡大・充実を図り、団員数が100万人を超えていた時期と重なる²。

この頃、私立中学校に通う子供は3%程度³であった。2016年度は約7%であり、今の子供たちに比べると中学受験率はまだ低かったことが推察される。

中学生・高校生（1989.4～1995.3）

1989年に中学校、1992年に高校入学。経済ではバブル景気とその崩壊の時代にあたる。高校を卒業する直前、1995年1月に阪神・淡路大震災が起きている。

子供の遊びに目を向けると、1989年にゲームボーイ、1990年にスーパーファミコンが発売され、テレビゲームはますます子供たちの間に浸透した。

中学校・高校においては、1989年に改訂された「中学校学習指導要領」「高等学校学習指導要領」で、部活動参加をもって必修クラブ活動の履修を認める「部活代替措置」が設けられた。結果として生徒の部活動加入を義務付ける学校が多く、中学・高校の運動部活動加入率も上昇していた時期である⁴。競技スポーツでは、1992年のバルセロナ五輪で、水泳の岩崎恭子(1978年生まれ)が金メダルを獲得している。

1990年には大学入試センター試験が始まる。1992年に大学・短大志願者はピークを迎え⁵、まだ厳しい受験競争が残っていた時代といえる。

高卒～社会人（1995.4～）

1995年3月に高校を卒業。この年の女性の大学(学部)進学率は22.9%、短期大学(本科)進学率は

¹ 厚生労働省「人口動態調査」

² 公益財団法人日本体育協会 日本スポーツ少年団「日本スポーツ少年団50年史 ダイジェスト版」p54
<http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/syonendan/doc/50thdigest.pdf>

³ 文部科学省「学校基本調査」

⁴ 中澤篤史 2014『運動部活動の戦後と現在—なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』(青弓社)参照

⁵ 文部科学省「学校基本調査」

24.6%である⁶。

四大卒の女性が就職したのは1999年。就職率は前年度より約5ポイント低下し、女子は59.8%であった⁷。翌年の2000年からはさらに低下し、大卒就職は「超氷河期」を迎える。また、学卒無業者や非正規で働く若者の増加、「フリーター」の増加が社会問題になりだした時代でもある。一方で、男女雇用機会均等法の改正、育児・介護休業法の改正、次世代育成支援対策推進法の成立と、「働く女性に関わる対策」が相次いでいる⁸。

スポーツではサッカーが盛り上がりを見せ、1997年に「ジョホールバルの歓喜」、翌1998年には、フランスで開催されたFIFAワールドカップに、日本が初出場を果たしている。また、この時期は携帯電話の普及率が急速に上昇している⁹。学生・社会人の頃から携帯電話を所持する人も多かったのではないだろうか。

母親になって

2000年代の平均初婚年齢(妻)が27～28歳、また2005年の第1子出生時の母の平均年齢が29歳である¹⁰。初婚・第1子出生時年齢ともに分散化が指摘されているものの、仮に29歳(2005年)で出産したと想定すると、調査時点で40歳、小学5年生の母となる。

そのような母親を例に考えると、子供の幼児期には「男女雇用機会均等法」の改正、「新待機児童ゼロ作戦」についての発表と、女性の就業と子育てに関する施策が相次いでいる。2010年には「イクメン」が「新語・流行語大賞」のトップテンに入り、日常の光景でも共働きの夫婦や育児に関わる父親を目にする機会が増えてきたのではないだろうか。また、子供が小学校に入学する直前の2011年3月に東日本大震災が起きている。

子供に関しては、2008年度に小学5年生・中学2年生を対象とした「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」が始まった。自治体や学校単位でさまざまな体力向上の取り組みが展開される中で、小学生生活を送っている。また、スポーツ指導における安全対策や部活動の休養日設定などが進み、子供たちは今後も母親とは異なる体育や運動部活動を経験していくと考えられる。

⁶ 文部科学省「学校基本調査」

⁷ 文部科学省「学校基本調査」

⁸ 厚生労働省「平成27年版働く女性の実情」

⁹ 総務省「通信利用動向調査」

¹⁰ 厚生労働省「人口動態調査」

参考文献

ベネッセ教育総合研究所(2013)第2回 学校外教育活動に関する調査 2013

<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=3263>, (参照日 2017年12月1日)

藤田紀昭(1995) スポーツ集団の運営形態に関する研究—特に子供のスポーツチームの運営に注目して—. スポーツ社会学研究, 3:47-59.

宮本幸子(2017) 小学生の組織的な運動・スポーツへの参加阻害要因に関する研究—母親の意識の分析をもとにして. 日本体育学会第68回大会体育社会学専門領域発表論文集, 25:105-110.

村山亮介・渋谷崇行(2017) 子供のスポーツ活動における保護者の問題行為に関する研究—保護者の問題行為の因子構造の検討. 日本体育学会第68回大会予稿集, 98.

永井洋一(2010) 賢いスポーツ少年を育てる. 大修館書店

日本体育協会 スポーツ少年団 リーダー資格.

<http://www.japan-sports.or.jp/club/tabid/275/Default.aspx>, (参照日 2017年12月1日)

西島央・木村治生・鈴木尚子(2012) 小中学生の芸術・スポーツの活動状況に関する実証研究—地域, 性, 家庭環境による違いに注目して—. 文化政策研究, (6):97-113.

桜井智恵子(2017) 「母役割プレッシャー」のつくられ方—ケアを取り込むネオリベラル. こころの科学, 193:29-34.

渋谷崇行(2016) 子供のスポーツ活動を支援する保護者の負担感とその影響要因—サポートシステムの構築に向けた基礎的研究—. 2015年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, 249-258.

友添秀則(2016) 運動部活動の理論と実践. 大修館書店

内田良(2017) ブラック部活動 子供と先生の苦しみに向き合う. 東洋館出版社

FC ゴール <https://www.fcgoal.org/>, (参照日 2017年12月1日)

新町 SVC スポーツ少年団 <http://shinmachi-sc.org/club01.html>, (参照日 2017年12月1日)

小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究

2017年12月発行

発行者 公益財団法人 笹川スポーツ財団

〒107-6011 東京都港区赤坂 1-12-32 アーク森ビル 11F

TEL 03-5545-3303 FAX 03-5545-3305

E-mail info@ssf.or.jp URL <http://www.ssf.or.jp/>

無断転載、複製および転載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを明記してください。

本事業は、ボートレースの交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。

